

でも同じ事だと思ふと黙つて後をついて歩いてゐた。

二人はやがて、淺草の町に出た。そこではまだ方々の店に灯りがついて、これから遊びに出かける人達は、酔つぱらつて唄を歌つたり何か大聲でわめきながら、暗い町を縫つて歩いてゐた。二人は矢張り黙つて歩いてゐたが、大きな下駄屋の前に来ると正さんはふと足を止めて、

『重さん、君の下駄は随分酷いね、下駄を一足買つてやらう』と云つて先に入つたそしてシヨウウキンドの中にある、正札のついた駒下駄を一足買つて、

『さこれを履いた方が好いや』と云つて重吉に渡した。下駄屋を出てしばらく歩くと足袋屋があつた、正さんは又たそこに入つて、

『重さん君の足は何文、十一文か随分大きいな』と云ひながら紺足袋を二足買つたそれから晒布を二反買つて、一反は重吉に渡して、一反は自分が抱えた。

『全く昔からバクチを打つ奴に金が入ると、フンドシを先に買ふつて云ふけれど本

當だよ』と足袋屋の店を出ると正さんは大きな聲で云つた。それから、

『さ之れで好いや、今度は何か喰はう。重さんはそばを喰ふかね』と聞いた。重吉は黙つて首肯いた。彼はさつきから、正さんのする事が、何う云ふつもりで、下駄を買つたり、足袋を買つたりしてくるのか判らなかつた。それにもうそろ／＼酒の氣も醒めかけて、堪らなく眠くなつてゐたので、何うでもなれ、と云ふやうな氣になつてゐたのである。

正さんは又た黙つてその暗い町を引き返した。そして雷門のそばの大きなそば屋の所に來ると、

『こゝで喰はう』と云つて先に入つたが、威勢よく、さつさと二階に上つてしまつた。重吉はさつきからさうして、下駄だの足袋だの晒布だのを大切さうに抱えて歩いてゐると、宿入りに行く小僧のやうに思はれて、自分の大きな身體を考へると、堪らなく可笑くなつて、くす／＼笑ひながら二階に上つて行つた。

正さんはもう、その廣い部屋の真中邊に安座をかいてゐたが、重吉が上つて來た姿を見ると、

『さ、重さん、こゝへお出でよ』と卓子の前を指して『今夜は本當に嬉しかつた』と又たにこゝろ笑つてゐた。そしてそばの女中が上つて來ると、

『重さん、君は何を喰ふ、うんと喰つてくれよ、大丈夫だから』と重吉に聞き初めた。

『僕は今夜、友達のとこへ行つてど馳走になつたから』と重吉が斷つても、

『そんな遠慮する事はないよ、大丈夫だからうんと喰つてくれ』と酒とそばを誂へた。

『重さん君は仲々えらいんだつてね』と女中が行つてしまふと、正さんは突然思ひ出したやうに云ひ出した。重吉は再びぎよつとした。そして之れはきつと勘吉が何かつまらない事を喋舌つたに違ひないと考へて、彼は黙つて、にや／＼笑つてゐた。そ

れは相手の出方一つで、何うにでも變らうと思ふ、彼のするい作戦だつた。

『いや本當にさ、勘さんがそ云つたせ、あんなに白ばつてゐるけれども、本當は随分教育もあるし、何だつて出来るんだつて、俺そんな事知らないもんだから、馬鹿にして、本當にすまなかつたと思つてゐた。重さんなんか、そんな事を何とも思やしないだらうが』と云つて、笑ひながら頭を搔いた。重吉はその話を聞いてはつとしながら、

『教育なんて、そんな事が』とにや／＼笑つてゐた。

『そんなに白ばつてくれなくつたつて好いんだよ重さん、君みたいなのがあんな事をするな何かわけがあるだらうけど、まあ諦めて俺達とも交際つてくんねえ、ね、俺なんか、本當に悪氣も何もありません。たゞバクチが好きだけで、今年なんか寒の中に、三七日水垢離をとつた位だ。勝つたつて別に錢が惜しいわけでもなし、たい勝ちさへすりや氣持が好いんだ。酒も女も嫌いだ。たいバクチさへ打つてりや好いんだけ

ど、今日は餘り苦しいもんだから、あんな事をやつちやつて、あれは俺の本心からやつたんぢやないから、そのつもりで本當に交際してくれよ、なあ重さん」と女中が持つて來た酒を、重吉の盃について『本當に遠慮しないでうんと喰つてくれ』と熱心に勧めるのであつた。重吉は正さんが、意外に取り違えてゐるのを聞くと、自分でも本當の自分が分らないと思ひながら、餘りの相違に、何となくすぐつたいやうな氣になつた。そしてこの正さんと云ふ男が、口は悪いが單純で、たゞバクチばかりに夢中になつてゐる性質が、彼の氣持を楽しくした。

『正さんはそんなにバクチが好きなのかね』と訊ねて見た。

『あゝ、俺はもうバクチより外に何も楽しみはないんだ。あすこであゝして毎晩やつてゐても、場錢を皆なさらつてしまふ位勝つ事は度々あるんだ。けどさうなるとつまらないからね、皆なに金を貸してやつて又た始めるんだ。さうして結局俺がまた負けちまうやうなことも幾度あつたか知れやしない。俺は本當に駄目だよ』と正さん

は愚痴らしい事を云つたが、それでも悔むやうな様子はなく、心持のよささうに『はゝゝ』と笑つた。

重吉は滿腹なのを我慢しながら、天麩羅そばを一つやつと平げて、徳利の酒を明けてしまふと、

『本當にもう之れで澤山だ』と幾度か斷らなければならなかつた。

『本當かい重さん、本當に喰へないのか』正さんは何遍も念を押した。さうして漸く納得すると、勘定をする時にそこにゐた小さな女中に、

『さ、お前にも小使をやらうな』と二十錢札を投げ出して、愉快らしい顔をしながら、急いで梯子段を下りてしまつた。

一杯か二杯飲んだ酒で、正さんはすつかり好い心持に酔つてゐた。表てに出ると、何か鼻唄を歌ひながら、ぶら／＼と歩いてゐた。重吉はそのあとから、正さんに買つて貰つた荷物を、大切さうに抱えて歩いてゐた。

『どう見たつて明日宿入りに行くよと云つた恰好だ』さう思つて重吉はまたくすくす笑つて見た。

正さんは何にも知らないで、前の方をぶら／＼と歩いて行く。屈托も何もないその姿にはつい一時間ばかり前に、蒼い顔をして眼を血走らせて、イカサマの賽を手品に使つた男のやうな俤は見えなかつた。

『どう見たつて、子供のやうに無邪氣な男だ』

重吉はその後姿を眺めながら呟いた。もう更けかゝつた町には、往來の人も絶えてゐた。吾妻橋はその黒い長い身體の影を暗い水の上に落して靜かに横になつてゐた。橋の上から川面を覗くと、向ふ側のサツポロビールのイルミネーションや、枕橋邊の電氣の光を映しながら、水はゆる／＼と流れてゐた。寒いほど冷たくなつた夜の秋風が、思ひ出したやうに吹いて通つた。

『寒くなつたね重さん』と云ひながら立ち止つた。そして重吉も單衣物を着て、寒

さうな姿をしてゐるのをぢつと見てゐたが、

『重さん、小遣がなくなつて困つたら、いつでも俺に云つてくれ、受けた時ならいくらだつて貸すから』と云つて『は、』と取付けたやうに笑つたが、それつきり又た黙つて歩き出した。

重吉は正さんのあとをついて歩いてゐる中に、妙に氣が沈んでしまつた。正さんはバクチを打つ時は、眼を据ゑて凄い顔をしてゐるが、その時になると、いつもかうして小供のやうに無邪氣になれる。そして自分のやうに工場物を盗み出して毎晩つまらない贅澤に耽つてゐる人間に、判らないとは云ひながら、教育のある男だと云つて尊敬したり、氣の毒がつて下駄や晒布を買つたり、そばや酒を御馳走して、小供のやうに喜んで笑つてゐる。今日逢つて喧嘩した、相田にしても矢張りさうだ。二十五にも六にもなるまで、女の味一つ知らないで、喰ふや喰はずの貧乏と戦ひながら、自分の信じた道に進んでゐる。それを俺は單調だと云つて笑ふのだが――その相田でも松

山でも、生活が苦しいと云つて嘆いたり、時々妙な恐怖や戦慄に襲はれて堪らなくなつてくると、恐ろしい事は云ふけれども、そのほかの事になると、彼等は小供のやうに無邪氣に笑つてゐる。

『それはきつと、何か一つの事に生き切つた人間ばかりに許される笑ひなのだ』
橋を渡り切つてしまふのも知らないで、重吉は深い考へに沈んでゐた。

『俺なんかは相田の事を單純だと笑ふけど、その單純さ一つすら持つてゐない人間なのだ。貴様みたいは何をしようと云ふあてもない人間は、何にも生きてゐない。結局生きた人間ではない、と相田が云つたのは本當なのだ。それだからいつも嘘と誤魔化しばかりで暮してゐて、とう／＼自分でさへ、どれが本當の自分だか判らなくなつてしまつたのだ。本當に俺はもう、心から面白く笑ふなんて云ふ事は、何年前にあつた事なのかすつたり忘れてしまつた位だ』さう思ふと彼は堪らなく苦しく寂しくなつて來た。そして今夜もまた昨夜のやうに、魂を抜き取られるやうな苦しみに、もがく

のではないか思ふと彼は何となくぞつとした。

『重さん、どうしたんだい。氣持でも悪くなつたんじゃないか』と正さんが肩をたたくので、彼はやつと我に返つた。そして、

『なあに、少し飲み過たもんだから』と云つて覺えず『へ』と笑つてしまつた。
『重さんは思つたより弱いんだな』と正さんも笑ひながら暗い横町の方へ曲つた。

七

それから五日目の夕方だつた。セルの着物にセルの羽織を着て變り色の帽子を被つた、重吉の姿が東京驛の一等室に現はれた。色白の面長な彼には、それ等の着附けもよく似合つた。誰が見ても昨日まで、いや今日のつい先刻まで、メリヤス工場の追廻しをやつた者とは見えなかつた。彼はその待合室の入口のところで來ると、例の通り細い眼をちら／＼と働かせて、部室の中を見廻してから又た悠々と入つて來て、隅の

方の椅子に腰を下した。そして、懐ろから萬年筆を出して、來しなに買つて來た封緘端書に次のやうな文句を書きつけた。

松山、こないだ話した通り俺は又たこの東京を今夜離れる。それはつまり、自分で失した自分と云ふ奴を、これから探しに出かける爲めだ。俺が北海道くんだりまで行つたのも、今日ほど意識はしてなかつたが、矢張りその目的であつたらしい。その中に俺は疲れて東京へ舞ひ戻つた。それから例の工場へ入つたのだ。然しどこへ行つても、罪惡の臭氣を獵犬のやうに嗅ぎつける俺は、そこで又た俺の仲間を嗅ぎ出した。そこから始終絞り取つた。さうして押上や馬道の安料理と、ケコロの女郎と云つた工合に安價な耽溺が又た續いた。然しこんなバカゲたつまらない事は一度やつた人間には長續きのするものぢやない。その中に俺は又君の知つてゐる例の發作のやうなものに襲はれ始めた。とても苦しくつておつとしてゐられない。そこでまた愈々決心して、どこかで失くして來た俺と云ふ者を上方の方へ探しに出かける

君等に云はせたら、道は遠きに非ずなん 笑ふかも知れないが、十七八の時に無暗に書物を耽讀して、知識的に老衰してゐる、判りばかりの早い俺のやうな都會の人間には、とてもそんな事では間に合はない。どこに落てるか、東海道の並木の枝にでも引掛つてゐるか、見附け出すまで歩く丈だ。然し愈々行脚に出かける俺の今夜の装ひは、セルの上下揃つたのに角帯をしめて、ソフトを被つて、二等室に納つてゐる。何れ汽車を降りて一日二日たつたら、一枚づゝなくなつて、間もなく印袴纏に、繩帶と云ふ事になるだらうが、今夜は先づ之れで若旦那と云つた格だ。之れも行きがけの駄賃に、彼等を脅して失敬したものと思へば、腹も立つまい。何處へどうなつたか判らない、自分と云ふ奴に打つかつたら、早速手紙で知らせよう。それまでは失敬する。相田にもよろしく云つてくれ。こんな事を書いてゐると、俺でも妙にセンチメンタルになる所が不思議ぢやないか。フ、。

書き終ると重吉は、それをポストの中に入れた。そしてそれを受取つた時の松山の

顔を色々想像してまたくすりと笑つて見た。東京へ歸つて來ても、一度も逢はなかつた母親や、姉の姿も一寸頭に浮べて見た。そして柔かな長椅子の上にござりと横になつて眼をつぶつた。

母と子

朝の九時頃から、夕方の四時頃まで、午飯も喰はずに新吉は得意まはりをしてやつと魚を賣り切つて了つた。そして裏長家のかみさんに、磨砂をもらつて、丁度その前の井戸が、柄杓で汲めるほど浅いのを利用して磐臺を洗つてしまつた。軽くなつたために、反つて中心がとれなくなつて、ぶら／＼する盤臺を擔いで、彼れもまたふらふらと歩き出した。

この二た月以來、あらつた事のない彼れの腹掛や股引は、魚のぬらや土にまみれてぴか／＼と光るほど汚れてゐた。朝のこみあつた電車などに乗ると、からだのいきれで、着物にしみた魚の匂ひが發散する爲めに、誰れも顔をしかめて彼れのそばから遠ざからうともがくほどであつた。新吉は自分でも自分が子供の頃に、山の手の邸町へ

廻つてきた乞食八百屋といふのを思ひ出すほど汚いと思つてゐた。

『いや自分でさう思ふほどであるから、人はきつと乞食魚屋ぐらゐの事は云ふかも知れない』とも思ふのであつた。

新吉はやがて、I町の墓地と工場の裏町へ来たとき、兩方に下した盤臺に渡した天秤に腰を掛けて、腹掛の井から、今日の賣上げを出して數へて見た。が、結局、それは途々胸算用しながら来たのと、いくらもちがひもないほど、わづかばかりの儲けであつた。彼れは家へ歸つて、母親にその金を渡すときの事を考へると、頭の中が暗くなつた。働いても働いても何うしても儲からないのである。そして昔氣質の商賣なれない母親は、先月の家賃の拂へない事を、死ぬやうに苦しめてゐる。何うしたら好いのだか、此頃では新吉にも、もう考へのつけようが、なくなつてゐた。けれども彼れは、天秤に腰を下したまゝ、ぢつとうなだれて考へてゐた。工場の中では、鐵板を切る音や、鎚の響が入り亂れて鳴り渡つてゐた。からたちの破れ垣の向ふに見える墓場

には、四月はじめの夕日が、柔らかな光りを投げてゐた。新吉は腕組をしたまゝ、銅像のよう 動かなかつた。

しかし幾ら考へても、矢張りなんの新らしい事。考へ浮ばなかつた。そこで彼れは又た立ち上つて、天秤を肩にして、ぶら／＼と歩き出したのであつた。

山の手の春の夕暮は静かであつた。垣根越しに高く見える櫻の梢には、淡紅色の蕾が脹らんでゐた。また遠い門の奥から、優しい琴の響のする家もあつた。新吉には、かういふ家の中に住んでゐる人々は生活の苦しみなど、云ふ事は知らないであらうと思つた。新吉も幼い頃には、斯うした家に育つたのではあつたが、父が零落して、自分で世の中へ出るやうになつてからは、家らしい家に住んだことはなかつた。もつとも、三四年前までは、何うかして金を儲けて、昔の家を買ひ返してと、少しは青年らしい空想に耽つた事もあつたのであつたが、今ではそれよりも、小綺麗な家に住んでゐる女髮結などを見て、女でさへあんなにしてやつて行くのにと、只管に感嘆するほ

ど、腑甲斐なくなつて了つた。

道行く人の楽しげな顔を見ても、往來で遊ぶ子供の群を見ても、新吉は世の中に自分ほど意氣地のない者はないやうに思はれるのであつた。

盤臺を擔いで一日駆け廻つたあとであるから、腹の皮の背に張りつくほど空腹になつてゐたが、それでも新吉は急いで家へ歸る氣にはなれなかつた。さうして、強いてぶら／＼と歩いてゐるのであつたが、空腹はまたよけいに彼れの氣持を物悲しくさせるのであつた。

ぐづ／＼としながらも新吉はやつぱりその薄暗い家に歸らなければならぬのであつた。裏口に廻つて、盤臺をガタリと置いて、

『たいいま』と云ふと、母親は、

『おかへりかえ、大變おそかつたね』と、中から障子を明けてくれた。新吉がいつものやうに、庖丁や俎板を渡すと、それをとりにながら、

『なにかお菜にするものを取つておいてくれたかえ』と、もう洗つて來た盤臺を覗くやうにして尋ねたのであつた。

『ちつとも儲からないものだから、みんな賣つちまつたんです』新吉はさう答へながら、もう何となく、いやな氣になるのであつた。いくら貧乏しても、昔し食物に矢筈しかつた癖のなくならない父親と一緒にゐる事であるから、母親の苦勞も大てい事ではあるまいと思つた。けれども何を賣つても儲からない此頃では、商賣物となるとつい一切れでも餘計に賣りたくなつて、賣り切つて了つたのであつたが、それがためにもまたあした、父親が、ぶつ／＼云ひはしまいかと思ふと、なほさら暗い氣持になるのであつた。

新吉が足を洗つて、上つて行つたとき、父親は戸を半ば下した薄暗い店の方へ横になつて、小説を讀んでゐたが、

『たゞいま』と新吉が挨拶をしても、

『ふん』と云つたまゝ、なほ小説に讀み耽つてゐた。それから新吉は母親の前へ座つて、腹掛の井から金を出して、さつき一度數へた物であるのを、又た改めて勘定してから、

『けふも之れつきりしか儲からないんです』

と、元金と儲けの金を別に並べてそこにおいた。それはわづかに五十幾錢しかないのであつた。米が一圓に五升ぐらゐあつた時の事とは云ひながら、又た父親の食料としては、ほかの兄弟達から月々十圓程の金を送つて來るのであつたが、夫だけの收入では、その中から明日の新吉の電車賃や、湯錢や、煙草錢を引けば、とても一家の者が暮して行く事は出來ないのである。

『まいにち之れでは、とても遣り切れはしないね』と母親は毎日おなじように、途方にくれた顔をするのであつた。まつたくこの一と月半ほどの間に、ものゝ一圓と儲けて來た事はないのであるから、母親の困るのも決して無理な事ではないのであつた

けれどもいつも、此の腹の減り切つた、疲れたところへ母親の苦情を聞かされるのは、新吉には堪らない苦痛であつた。彼れはその元金の方を財布に入れて戸棚へ投り込んでから、

『かう不漁では仕方がないけれど、また儲かる時が來ますよ』それも毎日云ひ古した事であつた。が、しかたがなしにさう云ひながら立ち上つて、風呂に出かけて行つて了つた。

夕飯のときにも同じ卓子臺に向つてゐながら、三人とも黙つて、一言の口も利かなかつた。さうして食事がすむと新吉は、黙つてのつそりと二階へ上つて了ふのであつた。

北側の三疊敷の狭い部屋が、新吉の唯一の城廓であつた。その部屋は、北の方が隙間だらけではあるが、腰高の窓になつてゐて、南は人に貸してある部屋との間が、襖で仕切られてある爲めに、一年中日光のさす事はないのであつた。おまけに此の部屋

についてゐる押入の襖は、前の借家人が、壊して了つた爲めに、押入れはガランとして大きな口を明けてゐた。それが、この薄暗い狭い部屋に、よけいに物置か家根裏のような陰惨な感じを與へるのであつた。しかし新吉は、此の部屋に入つて、向ふのお寺から借りて來た破れ机の前に座つた時だけ、やつと自分自身に歸つたような氣になるのであつた。さうして彼れはその机に頬杖をついて、それからそれへと、果しもなく物思ひに耽るのが常であつた。

新吉が母親と二人して此の部屋を借りたのは三月程前であつた。その頃の新吉は、彼れが青年期に入つてから、はじめると云つて好いほど、謙遜な穩やかな氣持になつてゐた時であつた。

夫れ以前の彼れの生活は、焼くような焦燥の中にその半生を送つて來たのであつた。丁度二年前の二十二歳の春までに、彼れは色々勞働をしたり、相場をしたり、大阪へ走つたり、乳屋をしたり、彼れの力で出來る限りの事をやつて見たが、何處にも彼れ

の進むべき道を見出す事は出來なかつた。彼れはもう疲れ切つてゐた。そこへその頃新吉が關係してゐた女が、親のために藝妓に賣られて、遠くへ行かなければならなくなつた。新吉はもうなにもかもいやになつた。それにまた新吉は、十九の春に烈しい神經衰弱にかゝつてからは、毎年早春の頃になると、何となく自殺を思ふやうな癖があつた。新吉はとうとう死なうと云ひ出した。女もすぐにそれに同意した。本當に死を覺悟したときに新吉は、たゞ一人母親に對しては何うしてもすまない氣がしたのであつた。幼いときから新吉は母親の愛だけで育てられて來たのであつた。もし母親がゐなかつたら、新吉はもうとうの昔に破落戸にでもなつたか、或は人殺しでもしてゐたかも知れないのであつた。轉々と東西に流浪してゐる間にも、遊蕩の月日を送つてゐた中にも、彼れは母親の事だけは忘れなかつた。是非一度は、自分の思ふやうな日を來させて、母親に安心させて、今まで自分を愛する事を、笑つた父親や親戚の者達に、母親にも誇らせたいと考へてゐたのであつた。

けれども彼れ自身が、此の世の中に生きて行く事に、何の値打も認めなくなつたとき、母親の愛もそれには遂に勝てなかつた。それは新吉が、此の虚偽に充ちた不自由で退屈な世の中に、戀する女と別れてたゞ飯を食ふと云ふ事ばかりに苦勞して生きて行かなければならないなら、むしろ氣持よく死ぬるときに死んだ方が好いと思つたらであつた。そして母親も自分が死んだために、世の中がつまらなくなつたならば、矢つ張り死んだ方が幸福である、と考へたからであつた。

かうして新吉は女と死を企てたのであつたけれど、女だけが死んで了つた。出血して眞蒼になつた新吉の身體が、擔架で姉の家に運ばれたときにも、父親も兄弟も、彼れの枕元に來るものは一人もなかつた。一人兄弟が死ぬと云ふ事よりも、之れによつて被る不名譽を彼等は心に悪んでゐたのであつた。けれども母親だけは、もう新吉も死ぬものと思つたらしく、夜通し枕元に坐つて、とき／＼眼を開いて、

『うゝむ』とうなると、新吉の手を胸に組合せて、

『お唱名を御唱へよ』と云つては、頭をさすつてゐた。

しかし新吉の傷は母親の心配する程の事もなく、日に／＼癒つて行つた。平素から並すぐれて健康であつた、彼れの體力の恢復は、思ひのほか早かつた。漸く立つことの出来るやうになつたとき、或晩新吉はそつと短刀を持ち出して來て、再びその胸に當て見た。けれども彼れはもう一度死の恐怖に打勝つ事は出来なかつた。そのとき彼れは始めて、無期徒刑囚が、前途に何の望みもない牢獄の中でも矢張り生きてゐる氣持が、漸く解つたのであつた。

けれども新吉には、再び世の中に立つて闘はうと云ふやうな勇氣はすつかりなくなつてゐた。母親にかけた散々の苦勞の事を思ふと、立身も出世もしたくなるのではあつたが、いまの彼れにはたゞ生きて行くと云ふ事だけが、すでに大變な努力であつた。すつかり健康が恢復したときに、彼れはあのトラビストのやうに黙々として働いてゐさへすれば好いと思つて土方になつた。一つにはあんな大傷をした後であるから、激

しい労働をしたならば、或ひは病氣になつて死ぬかとも考へたからであつた。

七月の焼けつくやうな炎天の下で新吉は苦しい仕事をひし／＼働いた。彼の身體はその豫想に反して日に／＼丈夫になつて行つた。

土方部屋の親方に、

『みつしりやつてみねえ、いまに立派な土方になれるせ』と云はれたときには、彼はすつかりがつかりした。短時間ですむ土方の仕事は、新吉は嫌ひではなかつたが床の上に筵を敷いた土方部屋で、多勢でわい／＼と暮すことが、何よりも彼れを苦しめた。そこでは安靜の餘裕も、沈黙の時間も得られはしなかつた。たゞ喧嘩と不潔があるばかりであつた。人間の生活といふよりも、全くそれは豚に近いものであつた。馬や牛はまだその小屋に別々に休まされてゐるのであるが、土方は虱と蚤の牧場にごろ／＼轉がつてゐるばかりである。

秋になつてから新吉は、郊外の大きな工場の機關部の人夫になつた。その労働もか

なり激しいものではあつたし、日給もたゞ生活をして行けると云ふ丈けのものではあつたが、その工場は珍らしく八時間制度であつた事が、何よりも彼れを喜ばせた。間もなく新吉は、郊外の小さな家を借りて自炊をはじめた。一人の友人も持たなかつた彼れは、とき／＼母親のところへ、月末拂ひにして取つて貰ふ米をとりに行くほかは一步もそとへ出る事がなかつた。その無爲な生活からのがれるために、近所の大きな古本屋から手當り次第に書物を借りて讀み耽つてゐた。けれどもそれも新吉の空虚になつた心を、ながく満してはくれなかつた。新吉はまただん／＼に酒を飲みはじめるとやうになつた。功名も富貴も榮達も凡てさうした華やかな幻は、死んだ女の姿とともに、彼れの心から消えて了つた。酒がたゞ彼れの心を麻痺させた。それは與へられたものゝ中でたゞ一つ残された快樂であつた。

新吉はあらゆる努力をして酒を飲んだ。彼れの勤める工場の附近の、酒屋も辨當屋も、そばやも、借りのない處は一軒もなくなつた。彼れは此の殘骸はどうなつて了は

うと、要するに殘骸に過ぎないのだ。何の惜むところもないと思つてゐた。次ぎに彼れは、その間を借りてゐた家の女とおかしの仲になつて了つた。女は新吉より十二も年が上であつた爲めに、新吉の心を失ふのを恐れて、自分から承知してその娘を彼れに許した。さうした亂倫な振舞は、新吉の心をよけいに荒ませるだけであつた。彼れは死んだ女の事を考へるともう、自分の行ひを振り向いて見る勇氣はなかつた。行く處まで行くが、こんな身體がどうならうとかまふものかと、さうしてできるだけの工面をしては酒を飲んでゐた。土方部屋で暮してゐたときよりも、より獸のやうな一年は過ぎた。

けれども或る晩新吉は泥酔して、無茶苦茶な眞似をした。さうしてそれがいままで堪えてゐた、人の好い亭主を怒らせて了つたために、彼れは未決監に投り込まれなければならなくなつた。それが彼れの結局ゆきついた處であつた。

悔恨と羞耻の中に暮した未決の一ヶ月は、浮ついてゐた彼れに最も好い反省の機會

を與へた。彼れはそのときに未だ自分が本當に世の中を捨て切つてゐるものでない事をつくつくと感じた。いままではただ、自分一人ぎめで世を捨てたやうな氣になつてゐて、いざと云ふ場合に悔恨や羞耻を感じる自己の不明と淺薄をつくつく憤つたのであつた。差入物一つなかつたその未決の生活は、既決囚と大して變るものとは思はれなかつた。その牢獄の生活ぐらゐ、彼れは格別恐れもしなかつた。けれども、もう一度自分がこの破廉耻の罪名を被る前に、世の中に出て自分の力限りの事をして見たいと考へた。さうして自分が覺悟して來るのであつたら、牢獄も厭ふべきものではないと思つた。

新吉は獄中から手紙を送つて、また母親に救ひを求めた。母親は狂氣のようになつて走り廻つた。父親もまた愛はないとは云ひながら自分の子を破廉耻罪で法廷に立たせる事は遂に忍びなかつた。苦しい中から示談金を出してくれたおかげで、星の降るやうな寒い晩に、新吉は漸く鐵門を出る事が出來たのであつた。

新吉はそれから輕子になつた。今までになく平穩な心持で一年を暮してから、獨立して魚屋を始めるために、母親と一緒に暮してくれとやつと頼んで、三月ほど前に此の二階の三疊を借りたのであつた。

その頃はまだ此の家は、縁日の夜店商人の人が借りてゐた。親子二組の夫婦と、娘と孫とが、下の部屋に住んでゐた。もとは西京焼の芋屋だつた店の土間が廣いためにその人達は表戸をいつも下してゐた。部屋の中は暗くつて、疊は目も見えないほど黒くじみ／＼としてゐた。そして脂臭ひ匂ひと、時々あけ放しになつてゐる便所の匂ひが、いつも部屋のなかに、むら／＼と籠つてゐた。

新吉は、はじめ此の家を越して來たときは母親に本當に氣の毒だと思つた。自分ではいまままで、土方部屋も木賃宿も警察の留置場も、凡ゆる不潔なところで暮してきたのであるから、それ位の事に堪え得ない事はなかつたが、母親はこんな所に住むのは初めてであつた。

「こんななきたなくつて寒くつて、辛抱が出来ますか」新吉がたづねたとき、
「おまへが商内にでかければ私はお寺へ行つてゐるからいゝよ」と母親はなにもかも諦めたやうな顔をしてゐた。そのお寺と云ふのは此の邊の地主であつた、そして母親の實家は昔からその寺の檀家であつて、新吉の母親は、その寺の細君とは殊に親しい仲であつた。この部屋を借りるのも、その細君の口きゝで、借りる事ができたのであつた。

中古の盤臺を探し出して來て、新吉がはじめて商内に出かけたときには、凡てが調子よく連んで行つた。魚河岸では馴染の間屋が、

「安くまけてやるから持つて行きねえ」と云つて、本當に安くまけてくれた。商内に出かけても、多くは先輩や知人の家を廻つたのであつたから、

「こんどはいよく魚やさんですか、あなたのなら安心していたゞけるから、まあ勉強しておやりなさい」などと同情されながら、品物もよく賣れた。けれども新吉は

さうした同情の長續きするものでないことを、この前に乳屋をした経験によつて、よく知つてゐた。彼れは毎日怠らずに、新しい得意をつくる事に努力した。さうして少しづつはそれも殖えて行つた。夕方に歸つてくると、親子はこの三疊で食事をした寒い日などには、母親はなにか温いものをつくつて待つてゐた。狭い部屋で、蒲團を二つ敷けないために、真中に行火を入れて、母子はあとあひになつて寝た。襖のない押入の奥や、北側の壁の隙間から冷たい風が吹き込むのであつたが、それでも新吉は温かに伸びくとねるのであつた。彼れはよく、幼い頃に母親が釋迦八相記を讀んでくれた事を想ひ出した。それからまた十七八の頃には、新吉の家がこんなどん底に零落れて行く途上にあつた。父親はやけ酒を飲んで母親をくるしめてゐた。それがためには新吉はよく父親と争つた。あるときは父親を殺して自分も死なうと思つた事もあつた位であつた。その時分に新吉は弟を連れて家出をしようと思つた事が幾度もあつた。さうして母親に、

『蜆やをしたつて、納豆賣りをしたつて、もつと楽しく暮した方が好いぢやありませんか』とよく云つた。

『あの時分、蜆やをしてもとよく云つたけれど、ポテフリの魚屋も蜆屋も大した違ひはありませんね』新吉は母親に云つて笑ふのであつた。

新吉が商ひを始めてから半月ほどたつたときの事であつた。それは薄曇りの寒い日であつた。いつものやうに裏口から歸つて來ると、臺所の障子は明け放しになつてゐた。そして家の内はガランとして、下に住んで居た人達は誰れもゐなかつた。そればかりでなく、襖は倒れ障子はふみにぢられて、部屋の中は火事場のやうに散らかつてゐた。新吉は下から大きな聲で、

『たゞいま』と怒鳴つた。けれども、いつものやうに母親の返事を聞く事は出来なかつた。

彼はすぐに、向ふの寺に行つた。母親はその庫裡で、火鉢にあたつて、寺の細君

と何か話をしてゐたが、新吉の顔を見ると、

『まあおまへ、けふは大變な騒ぎで、私はどうしようかと思つたよ』と云つた。

『一體どうしたんです。誰れか暴れ込んで、も來たんですか』

『いえ、あすこの下で親子喧嘩をして、おやぢさんと息子と二人で、唐紙をぶついたり、障子が倒れたり、その揚句にみんなどつかへ出て行つてしまつたんだよ。私はもう恐いからこちらへ御邪魔に上つてゐたところさ』と母親はさも恐ろしかつたように云つた。

『それでは僕だけ歸つてゐませう』と、新吉は一人先きに歸つてゐた。しかし夜になつても、下の人達は歸つて來なかつた。

翌る日新吉が歸つて來たときには、下の道具はすつかり片附けて、まるで空き家のようになつてゐた。二階に上ると、母親は一人して、ぼつねんと行火にあたつてゐた『どうしました』といきなり新吉はきいた。

『けふ、とう／＼引越して了つたよ。大家さんには話して來たと云つてゐたが、こんな空き家に居る事は出來ないし、困つた事になつたね』

それは本當に困つた事であつた。いまこれから又た貸間を探すと云つたところで、嵩張つた盤臺はあるし、魚屋はなまぐさい事でもあるから、容易に間を貸してくれる人のない事はよくわかつてゐる。それは新吉がこの間を借りる前にも、さん／＼苦勞した事であつた。母親はそれから長い間いろ／＼協議した。さうして折角かりた家であるし、下の土間に少し手を入れて、鹽物屋でも始めたら家賃位はとれるかも知れないと云ふ事になつたのであつた。

それにしても、手を入れるにも金が要る事であるので、母親はその晩すぐに、知合のところへ金を借りに出かけて行つた。こちらの思つたほどは出來ないのであつたがそれでも兎に角、店の手入れ位はできる事になつたのであつた。

しかしそれと同時に、父親を引取らなければいけないと云ふ事を母親が言ひ出した

そのころ父親は姉の家にあつたが、貧乏な乳屋をしてゐたその家では、いつも何かごた／＼が絶えなかつた。父親についての悶着はもう十年以上も前からつゞいてゐる事ではあつたが、新吉はもうそれも大抵をはりを告げていゝ時分だと思つた。親類や兄弟がよると觸るとなにかしらごた／＼としたのであつたが、その種は自分も播いた事は澤山あるのではあつたが、こんな不和な家が世間に數多くあるかと思ふほどであつた。こんどは自分が我を折つてさへゐればいゝ事であると考へたので、彼れはすぐそれを承知した。

父親は間もなく來た。そして店もどうやら魚屋らしい格好にはなつたが、さてそこに並べる代物はないのであつた。新吉は河岸の間屋に話をして、やつと少しばかりの鮭や鱈や目刺などを借りて來て、戸板の隅にちよ／＼と並べて置いた。さうしてはじめ二三日は、わざと品物を賣り残して、皿に盛つて店に並べた。

夜になるとその店の中でたゞ一つともる瓦斯の青白い光りが、乾き切つた鮭の切身

や、しこの目刺や、二つ三つ並んでゐる鹽皿の魚を寒さうに照してゐた。さうして魚は少しも賣れないのであつた。

時折に鮭の切身を一片ぐらゐ買ひに來る人があると、

『鮭でございますか、三錢でございます、はいお一つ』と母親は切口上で賣るのであつた。

『鮭一きれぐらゐで、あんなに可憐に云はれちや、買ふ方できまりがわるくなるぢやありませんか』と新吉が云ふと、

『だつてさう急におまへ、商人らしい言葉が出るものかね』と母親は不服らしい顔をするのであつた。

その頃から新吉の外廻りも思はしく賣れなくなつた。知合の人々も、義理や同情ばかりで魚を買ふわけには行かなくなつた。それに又た、それ等の人々のとこにゐる女中達は、新吉のやうな魚屋の來るのを喜ばなかつた。外の魚屋であつたならば、

『魚屋かへ、けふはいゝよ』と云つて断はれるのを、新吉が行くと、

『魚屋さんがお出でになりました』と云はなければならなかつた。それは馬鹿々々しくも滑稽なことだと新吉も思つてゐた。そして強いて何か云ふのも變な爲に黙つてゐたのではあつたが、たゞわづかに、出入の商人たちに威張る事を樂しみの一つとしてゐるそれ等の人達が、新吉を歓迎しないのも無理のない事であつた。新吉もまた、おづ／＼と、妙に氣の毒らしく断られたりすると、反つてこつちが氣の毒のやうな變な氣になるのであつた。

店賣りも思はしくないために、十日ほどして止めてしまつた。そして表戸はまたいつも半分下されて店の中はもとのやうに薄暗くなつて了つた。新吉が毎日儲けてくる金がだん／＼と少くなるとともに、母親の顔は暗くなつて行つた。一家の賄をしてゐる母親の手に、金のなくなるといふのは、何んなにか心細い事だらうと思つた。けれどもいまの新吉には、儲からない魚を賣るより外には、どうする事も出来ないものであつた。

つた。

月末になつても家賃に拂ふ金がなかつた。

『仕方がないから、もう少し延しておいてもらはうぢやありませんか』と新吉が云つた。

『わたしは今までそんな不義理なことはした事はないよ、そんな事がおまへ』と云つて、母親は自分の着がへを隣のかみさんに頼んで質に置いてやつと拂つた。さうして、

『わたしは、之れでもう嘗分どこへも出られない』と云つてゐた。それつ切り母親は親類へも行かずにゐた。それなのに、先月も又た家賃を拂ふ事が出来なかつたのである。

この頃では母親は、もういつも、ゐても立つてもゐられないやうな顔ばかりしてゐた。さうして新吉をつかまへては、

『一體おまへ何うする氣だへ』とせめるのであつた。新吉にも何うして好いかわからなかつた。それで結局は、

『人間が餓え死にをするやうな事はめつたにありませんよ、また、かうしてゐるうちには魚が澤山でて来て、儲かるやうになりますから、そんなに心配しないで下さい。あんまりくよくよすると氣が持てなくなるから』と云ふよりほかには仕方がなかつた。

さうしてこの二階にとち籠つて、物思ひに耽るのであつた。さうしていつも同じ疑問に到達するのであつた。働いてもくゝ喰ふに困るとは何う云ふわけだらう。また母親は自分を誰よりも愛してゐるし、自分も母親を一番なつかしく思つてゐる。二人は魂の底から愛し合つてゐる。それなのに、わづかな金のためにかうして毎日不愉快に暮さなければならぬとは、一體どう云ふわけだらう？ と。

その晩も新吉は、ぼつねんと机に向つて同じやうな思ひに耽つてゐた。そのとき、

『新吉々々』と母親が下から呼んだので、またやられる事かと思ひながら、ばたばたと下りて行つた。父親はいつものやうに散歩に出かけたと見えて、そこにはゐなかつた。餘り明るくもない電燈の下で、針仕事をしてゐた母親は、新吉が座ると、

『けふもねお父さんがね、はあつ／＼つて溜息をついては、わしはこんな生活をしてゐるくらゐなら、死んだ方が好い、もう自殺するよりしかたがないと云つてゐなされるんだがね、何うしたもんだらうね』と新吉の顔色をうかゞふやうに言ひ出した。新吉はその突然の話にちよつと驚いたのであつたが、わざと、

『お父さんの自殺も古いもんぢやありませんか、それにお父さんとこへはみんなから食料を送つて来るのだし、何もそんなに悲觀する事はないぢやありませんか』と云つた。

『それはさうだけれど、わたしだつてこんなくらしをしてゐちや、とても遣り切れ

ないよ、米屋にも、大家さんにもまだ拂つてはないのだし』

『それはよく分り切つてゐます』と新吉は言ひたかつた。けれども夫れでは母親が可哀さうだと考へたので、

『なにしろまだひぼしになるやうな事はありませんよ。どうせ商賣なんていふものは、はじめの中は喰ひ込むんですから、かうやつて遣つてさへすゝや、何うにかなつて行きますよ。世間には夜逃げをする人だつて澤山あるんですもの、いざとなればなんだつてやれるではありませんか』

『おまへはぢきにそんな事を云ふけれど、そんな事がおまへでできますかね』

『だつてお母さん、死ぬと生きるの境なら仕方がないぢやありませんか』

『いゝえ、なんと云つても私にはそんな事は出来ない』母親はもうなんとなく、ヒステリーのようになつて來た。新吉は何んとか優しい事を云つて慰めたいと思つた。けれども、もう慰める言葉もなくなつてゐた。貧乏の事實は目前にぶらさがつてゐる

のに、生優しい事を云つたつて、夫れは何んにもならない事と考へたからであつた。

『ともかく、もう少し辛抱して下さいな、さうして何うしても喰べられなくなつたら、死んぢやつたつて仕方がないぢやありませんか』

『おまへみたいなの、そんな亂暴な事を云つたつて、私にはほかの子もあるのに、そんな事はできない』と母親は下を向いて仕事をしてゐた顔を上げて、眼鏡をはづして、ちつと新吉の顔をみた。

『それぢや仕方がありませんよ。何うせかうして苦しい世の中で一軒の家を持つて行かうつて云ふんですもの、死ぬほどの決心がなくなつて何んだつてやつてけるもんですか。お母さんだつてお父さんだつて、いままで、何一つ不義理な事もしないで、堅くして暮して來たつて、やつぱりかうして貧乏するんぢやありませんか、さうして喰へなくなれば、誰だつて、いやだつて死ななけりやならないんです。何うせ死ぬより大した事はないんだから、さう思つて覺悟さへしてりや何だつて恐い事はありやしな

い。それをちよいとした事を、あゝ大變だ、大變だつてふるへてゐられた日には、こちらの氣が持てなくなるぢやありませんか』

『まあおまへがわたしに、そんな事を云へた義理ですか』と母親は眼に涙を一杯ためて口惜しうに云ふのであつた。

『だから僕はお母さんに樂もさせたいし、どうかして氣兼ねしず暮させたいと思ふからこんな事を始めたんぢやありませんか。僕一人なら、なんだつてこんなにくづくしてゐるもんですか、けれども何も彼もうまく行かないために、こんな風になつたんだけど、こないだから幾度も云ふやうに、さうびくくしないので下さいと頼んでゐるんぢやありませんか』とこんどは歎願するやうに云つた。

『それだつて、現にもうわたしだつて裸になつて、さうしておかずを買ふお金もなくなつて何うする事が出来ると思ふんだね』

『だからもう少し辛抱して下さいつて云ふんです。盗人したつて餓死させるような

事はしないから』

『辛抱しろつて云つたつて、之れ以上の辛抱ができるものかね』と云ふと、母親は突つぶしておい／＼泣き出した。新吉も、もう途方に暮れた。此の間からの毎日の争ひも、結局いつも母親に泣かれておしまいになるのである。さうして毎日々々暗い顔をして暮してゐる事がつく／＼といやになつた。さうしてそんなに苦しいなら、當分また姉のところへでも行つてくれれば、自分一人で働いて、その内になんとかするから、と云ふのであつたが、かうして出て來た限り、そんな事が出来るかと云つて泣くのである。夫れではこつちも何うして好いか判らなくなつて了ふのであつた。さうして夫れはつまり、自分で判断のつかない女の愚痴であるとは思つたが、然しもうかうなつては、何とも仕方のない事だと思つた。

『これだけ云つてわからなければ、お母さんの好いやうにするがい／＼ぢやありませんか、僕は何をしたつて反對はしないから』と云つて、戸棚の中から財布を出して、

彼れは表へ出て行つた。

春の夜の大氣は静におどんでゐた。空には星がかすんでゐた。明るい町には凡ての人が、楽しさうに歩いてゐた。新吉は三月まへにはじめてあの二階を借りたときの事を考へた。その頃は母子は、近所の人の羨むほど仲好く平和に暮してゐた。その後も新吉は朝早くから起きて毎日熱心に働いた。自分達はよけいな贅澤も願はなければ、しもしなかつた。夫れなのにかうして苦しんで母子は心で愛し合ひながら、争はなければならぬと云ふ事は、何んと云ふ馬鹿げだ事だと思つた。彼れはもうあまり頭がもや／＼する爲めに、その横町にある大きな濁酒屋に飛び込んだ。そこには新吉のやうに、腹掛をかけたなり、労働服を着た人達が、多勢して、女中が疍高い聲で我鳴る中で酒を飲んでゐた。新吉は二三本を飲む中にもう何うなつても構はないと云ふやうな氣になつた。母親も自分も心では愛してゐる。けれどもいつしよにゐて、斯うした苦しいらしをしてゐる限り争ひは絶えはしないのである。働いても働いても

と云ふより、働けば働くほど、喰へなくなる世の中である。同じ魚を賣るのでも、立派な得意を持つてゐる大きな魚屋では、高く賣つて金を残してゐる。さうして夫れはその主人がいまゝで働いた結果だと云ふ。けれども長く働けば夫れだけの結果が得られるのなら、いま働いてゐるものが、喰ふに困るわけではない。新吉はいまゝで労働したり、事務員をしたりして、熱心に働いた日の事を思つた。しかしいつでもまじめに働くものほど貧乏籤を引くのであつた。こんな馬鹿々々しい世の中を打ち壊してしまはない限り、こんな争ひはいつまでも續くのだ。憎み合つて争ふのでなく、愛しながら争ふやう愚劣な事が。新吉はさう思ふと、先づいまの自分の家から打壊さなければ駄目だと思つた。こんな風にぐ／＼してゐれば、母親のヒステリーはだん／＼に強くなつて行く。その揚句はいまより反つて悲惨な結果に陥るかも知れないのであると云つて、當分別々に暮す方が得策だと云つたところで、さつきのやうに聞き入れはしないのだから。

彼れは腹掛から財布を出してまた金を數へて見た。此の金を今夜使つてしまへば、明日からは買出しにも行く事が出来ないのである。けれどもさうしてどんづまりに向き合つて見たならば、どうにか局面が轉回するであらう。腐れ切つた雰圍氣の中からは、少しやそつとの補ひをしたところで、何も生れて來はしないのだ。凡てが打ち壊れてしまつたとき、人ははじめて新しい道を發見する事が出来るのだ。

と、もういゝ加減に酔の廻つてゐた彼れはさう思ふと、何となく氣が強くなつた。そして長い間彼の身體の中で眠つてゐた本能は、彼れの心を浮き立たせた。

二三日前に近所の二階を借りて、外廻りの床屋をしてゐる、大さん、と云ふ男が、『兄さん、ばかに好い別嬪のある家があるんだが案内するかね』と云つた事を思ひ出した。

新吉は居酒屋を出てから、大さんをその二階に訪ねた。大さんは仕事から歸つて來たばかりのところらしくバリカンの手入れをしてゐたが、新吉の顔を見ると、

『やあ、馬鹿に好い機嫌だな』とにこ〜笑つた。

『おい大さん、こないだ話した別嬪のある家へ連れてつてくれないか』と云ふと、

『俺ら顔をあたりに行くと、客を世話して呉れつて頼まれてゐるんだが、連れてつて大丈夫かな、おつかさんに恨まれはしねえかな』と、新吉の家庭を知つてる大さんは氣遣はしさうに云つた。

『どうなつたつて構はないんだ』と云はうとしたが、それでは大さんが連れて行くまいと思つたので、

『なに大丈夫だよ、今日は少しよそから金の這入つた事があるんだから』と、強い餘裕のありさうな顔をして見せた。

『そんなら行くべえ』と大さんは直ぐと立ち上つた。

二人はまた酒の安いバーに這入つて、いつまでも酒を飲んだ。

『あんまり遅くなるといけないから』と大さんに促されたので、新吉はそこを出た

二人は暗い路次を長いこと歩いた。そのとき新吉の頭に、電燈に風呂敷をかけて薄暗くした部屋で眠つてゐる老いやつれた母親の姿が浮んだ。

けれどもなに構ふものか、構ふものかと無理に元氣をつけて、大さんの肩につかまつて、フラ〜と歩いて行つた。

犬の死まで

一

空はゆつたりと晴れて、柔らかな日の光が山の中に流れてゐた。それは二月の末だとは思へない程、珍しく暖かな日であつた。そよ〜とした南風は、しやちこばつた木の枝を、ゆるやかに撫でるやうに吹いてゐた。銀簾をかけたやうに軒に輝いてゐた氷柱は、ぼたつ〜と落ちて、碎けてはまた光つてゐた。そして硝子張りの見張所の中は、まるで温室のやうになつてゐた。

窓際 作りつけた机にもたれて、新吉はうつ〜としてゐたのであつた。

『もう春が近づいて來たのだ』と思ふと、無爲な單調な、そして酷しい一冬を山の

中で過して来た彼れには、それが何よりも楽しい事であつた。兩肘を張つた上に顔を横にして、兩足を踏ん張つた草鞋のさきまで、硝子越しに射してくる日の光が、静かにちつと暖めてゐたのであつた。

彼れはまた時々眼を開けては、その景色を珍しさうに眺めてゐた。下の方の撰鑛場の屋根の向ふに聳えてゐる山の、枯れがれとして褐色であつた雑木林も、急に紫色に濕んで来たやうであつた。そして眼の前に突つ立つてゐる山の常盤木の梢は、静かな風にゆら／＼と揺れてゐた。それは丁度、活動寫真に見る熱帯の植物が、熱い日に輝きながら、音も立てずに風に動くやうな姿であつた。

見張所の入口も、珍らしく明け放しになつてゐた。そしてそこからも、射し込んで来る日の光が、眞黒な土の上に、明るい長方形を描き出してゐたのであつた。新吉のほかにある撰鑛係の事務員も、峰越しの澤にある露頭を見に行くと云つて、出かけて了つたあとであつた。見張の中は珍らしく、ひつそりと静まつてゐた、その時眞黒な

犬が一匹のつそりと這入つて来た。そして三尺ほどへこんでゐる炊事場で、黒澤と云ふ若い小使が、晝飯のあと始末をしてゐるのを、首を伸ばして嗅ぎ廻してから、またのそ／＼と出て行かうとしたのであつた。

それをみると新吉はふと身を起して、

『クロ、クロ』と出まかせに呼んで見た。

犬はふり返つてちつとしてゐた。

『クロ、コイ／＼』と、彼れは片手を伸して、喰物をやるやうな眞似をした。犬がそろ／＼と彼に近附いたとき、彼はその首をつかまへて、頭を撫でたり、咽喉をくすぐるやうな事をした。犬はやがて、腰を下して、赤土だらけになつたズボンの上に顔をのせて、ちつと眼をつぶつてゐた。

『黒澤、この犬はどここの犬だか知つてるかい』と彼れは小使に訊いて見た。

『えんばらのおなほやんがえのでやす』と、色の白い青年は、にこ／＼しながら答

へたのであつた。おなほやんと云ふのは、そのえんばらと云ふ小字に住んでゐる娘である。ほんとうにおかめの顔を面長にしたやうな眞赤な顔をして、赤つちやけた毛をハイカラに結つてゐた。毎日事務所の撰鑛場に、仕上げの仕事に通つてゐた。それなのにこの犬を今まで見かけなかつたのは不思議だと、彼れは思つたのであつた。

『おなほやんのとこのか、腹がへつてるやうだから、飯をやつてみよう』と云つて彼れは小使に晝飯の残りを持つて來させた。犬はそれを見ると、飛びつくやうに待つてゐた。彼は二三度ぢらしてから、足下の板片れの上に明けてやつた。そして犬は漸く満腹すると、前足をつゝ張つて、尻を立てゝ身體をぐつと伸ばしてから、少しづゝ斜めになつて行く日向を二三度嗅ぎまわして、ごろりと丸くなつて了つた。

午過ぎのハツバが時々坑内から、

『ーん、どーん』と起つてくると、犬はふと頭をあげては、きよとんとしてあたりを回した。さうして又ぢつと寢入つて了ふのであつた。

『この犬を、おなほやんのとこで呉れるかしら』と彼は黒澤に訊いて見た。

『くれるでやすべえ、おなほやん家では、碌々飯もくれねえものだから、しじゅう村さ漁りにばかり來てるでやすもの』と黒澤は答へたのであつた。

二

新吉はこの犬を飼つて、毎日連れて歩きたいと思つた。事務所から山の現場まで一里程山道を毎日通つてゐる彼は、たとひその景色は好きであつたとは云ひながら、それでも時々退屈になることがあつた。廣々とした山野の中を、犬を連れて歩きたいと云ふことは、都會で育つた彼の少年時代からの欲願であつた。廣々とした山の中を思ふやうに犬に驅けさせて、さうして自分も驅けて歩いたら、とそんな事を幾度空想したか知れなかつたのであつた。けれども今までに幾度か飼つた事のある、どの犬も結局終りまで彼の手元にゐなかつた。子供の時から飼つてゐて、少し大きくなると行

術不明になつたのもあつた。殺されたのもあつた。ケチな高利貸の家になつた頃、その主人に内證で飼つてゐた犬は、最後に主人に發見されて、涙を吞んで廣い田圃の中の丸太に結へて來た事もあつた。そうしていつもそんな時には、彼が少年の頃、彼の家で飼つてゐた犬を、犬殺しに殺された時、

『もう決して犬は飼ひませんよ、本當に罪を造るから』と云つて彼の母親が泣いた事を思ふのであつた。そのときも彼はふとその事を考へたのであつた。けれども又た誰れも彼れも死んで行く此の世の中に、さうして何事も罪の種だ、迷のもとだと云つて否定して行つたら、あとには何が残るのだ。愛する中だけの人生だ。すぐ消えて行くシャボン玉でも、美しいものなら愛したら好いのだ。別れのつらさを考へて、女に惚れることも出来なかつたら、それこそ猶更つまらないことである。構ふものか、と又自分の氣持に反抗して見たのであつた。

暖かい日射しにぬくもりながら新吉がそんなことを考へてゐるところへ、峰越の露

頭を見に行つた二人は歸つて來た。そして先き立つてゐた鈴木は、

『ほう、犬があるな』と云つて、黒犬の頭を屈んで撫でて見た。犬はぢつと薄目を開けたいけで起きようとしなかつた。さうして二人は火の氣のなくなつた爐邊の椅子に腰を下すと、

『あの錠は亂れてゐるから、碌なもんぢやねえ』と鈴木が云ひ始めた。

『然し僕は、二號の脈があすこへ行つて、斷層になつたんだと思ふんだ』と松永が云つた。そして二人は今見て來た露頭について、或ひは二號坑の奥で打つ鑿の響が聞えたとか、いやそれはもつと右であつたとか、果しもつかない議論を繰り返してゐた。新吉はさうその當てにもならない、鑿脈の講釋を聞くのは飽き／＼してゐたので、

『ねえ君、僕はこの犬を貰はうと思ふのだけど』と鈴木に向つて云つたのであつた
『貰はうつてこの犬は何處の犬よ』と鈴木はやつと議論をやめて、

『俺らも好い犬が一匹欲しいと思つてたが』と云つた。

『えんばらのおなほやんとこのださうだけど』

『おなほやんのとこのなら、犬よかおなほやんを貰つたらよかべえに』

『ばかにしてら、あんなおかめ』

『おかめだつて、身體は大きいし、親切だし、好いでねえか』と云つて鈴木は笑つた。『しかし餘り親切だと、松永君みたいに測量の歸りにぶつ倒れる事になるからな』と云つて、新吉も松永を顧みて笑つてゐた。

『僕をなにも、犬の引合ひに出すのはひどいよ』と松永は、頭を搔きながら笑ひ出した。そして三人は

『あは、』と笑つたのであつた。

『さ、交替前に一廻りしてくべえか』と云つて鈴木は、羽目にぶら下げたカンテラに火をつけた。

『僕、廻つて来よう』と新吉もカンテラを持つてそとに出た。暖かい日は、大高取の峰の方に廻つてゐた。村から通ふ堀子達も、陽氣の暖かい故であらう、いつもより早く、麓の方から二三人づつ、ぼつ／＼と登つて来た。

三

その日新吉はいつもより早く、一人して現場から歸つた。

『早く歸つて犬のことをおなほやんに談判しなけりや』と云つて見張を出たのであつた。

『犬よかおなほやんを談判しろと云ふに』と鈴木はまだ擲論つてゐた。新吉は見張を出ると、

『クロ来い』と叫びながら、山道を駆け下つた。クロはすぐに彼れを追ひ越した。そしてその日から、クロは新吉のものになつてゐたのであつた。

新吉はその當座、犬にばかりかまつてゐた。朝起きると彼れはまづそとに出て、『クロ、クロ』と呼んだ。縁の下に寝てゐた犬は飛んで来て、彼の胸にとびついた。そして事務所の前の畑の中を、大きく輪をかいて駆け廻つては、又た彼れの胸にとびついたり、足下にちやれたりした。朝夕の往復にも、クロは山道を嬉しさうに駆けてゐた。谷間の近道を知つてゐる犬は、人の通れないその道を通つては、新吉の來るのをもどかしさうにまつてゐた。さうして新吉の姿が見えると、また一散に駆け出して行くのであつた。

新吉が見張に宿直するときには、クロも村へは歸らなかつた。ランプ一つを灯した机の下で、十一時の交替時まで、ちつと本を讀んでゐる足下で、いつもクロは丸くなつて寝てゐるのであつた。

その頃事務所には小西と云ふ所長心得の男と、安部と云ふ撰鑛係員と、新吉と三人だけが寝泊りをしてゐたのであつた。

小西は東京に妻子を置いて來た、四十を越した男であつたが、安部は新吉と同じ年輩の、二十二三の青年であつた。この山の鑛主がまだ東京で雜貨商をしてゐた頃から小僧をしてゐたこともあるので、安部は絶えず鑛主夫妻のこへ手紙を出してゐた。それが爲めに誰れからも安部は、鑛主の隠し目附だと云つて、警戒の眼で見られてゐた。いつも三越タイムスと云ふような物を取り寄せては、夜になるとそればかり繰り返して眺めてゐる男であつたので、新吉とは餘り話も合はなかつたが、同じ事務所に起臥をしてゐるところから、毎日の現場への往復は、必ず二人は連立つて行くのであつた。

けれどもクロが來てからは、新吉は安部と一しよに現場へ通ふことが尠くなつた。彼はいつも安部よりも先きに出た。クロも新吉が出て來るのを待つてゐた。そして新吉は、

『そらつ』と云つて駈け出す、とクロは直ぐにあとに續いた。山道の乾草の上には

霜が白く置いてゐた。道程の中ほど迄来たところに、山裾の廣く濶けたところがあつた。その邊に来ると、いつも黄色い草の上に置いた霜が、さら／＼と朝日に輝くのであつた。クロは又谷間の近道をよく知つてゐた。

新吉が、高い峠の上をうね／＼と曲りくねつて歩いて行く中に、その近道を廻つて灌木の繁みの中から出て、きよとんとして待つてゐた。そして新吉の姿が見えると、急に又一散に駆け出して行くのであつた。そして深い叢に飛び込んで、山鳥を驚かせてゐることもあつた。

ある時、安部は新吉に、

『君はこの頃、犬にばかり夢中になつてゐるね、まるで犬狂人だね』と嘲笑ふような調子で云つた。

『だつてさ、君と話をすれば着物の事ばかりだし、鈴木君や後藤君は金山や銀山の事ばかりだし、犬の方がよつほど退屈しないからな』と新吉が答へた。安部はいやな

顔をして、それつきり黙つてしまつた。實際それからの新吉には、クロが唯一の友達であつた。

四

クロが新吉のとこへ来た頃から、山の鑛石の出かたは、大變に尠くなつた。それは今まで鑛量の豊富であつた鑛脈が、急に斷層に當つたり、掘りやすかつた磐が硬質の場所に變つたりしたがためであつた。之れ等の變化はこの山の經營の上に與へる、絶望的の現象ではなく、たゞ時々起つて来る極めてありふれたことなのであつた。そして又た、假令出鑛量は少なくなつても、鑛主は諸般の經費を引いて、優に利益のあることもわかり切つてゐたのである。夫れに拘らず鑛主は手紙の度毎に、

鑛況不振の際、諸事經費節約を旨と致され度く——と極り文句のように書いた後にやれ坑夫の賃金を拂ひすぎるとか、色々な材料を使ひ過ぎるとか、自分勝手な事ばかり

り云つて寄越すのであつた。

夫れがために一番困つたのは採鑛係の者であつた。

『いくら文句を云つて寄越したつて、切端が變つてきたもの仕方がありやしない。それにもう少し掘進すればよくなることは判り切つてるのに、坑夫にだつてこんな時には、少し位損をしてもちやんと拂つて貰はなきやならないのに、間代を上げていけないつて云ふのならみんな本番にするが好いんだ』と事務所に来ては、鈴木と新吉とが憤慨したのであつた。苦勞なれた小西は、何も彼もよく知つてゐた。

『まあそんなに怒らないでさ、何うせ鑛主なんて云ふものは我儘に極つてゐるのだから、もうぢき直りが出れば君たちも坑夫にもきつと樂をさせるから、辛抱してやつて呉れ給へ』と云つて宥めるのであつた。

けれども彼等はまた現場に來ると、こんどは坑夫から苦しめられなければならなかつた。

『旦那、おらとこの切端をみてくれよ、岩は硬くなるし、鑛石は出ねえし、あんなところを一間八圓九圓で掘らされたんちや、嬬や餓鬼は干乾しにしなきやならねえだ。間代を上げるか、切端を變へるかしておくんなせえな』と、泥だらけな仕事着を着て蒼い顔の鼻の穴を油煙で眞黒にした坑夫が、鑿を擔いで見張りに來ては苦情を云ふのであつた。

『まあ、も少し待つて呉れよ、直りが出さへすれば、きつと君達に樂をさせるからきつとだから』と鈴木も新吉も事務所では云はれたようなことを云ふより外に仕方はなかつた。

『だつてお前さん、直りが出て、鑛主がうんと儲かつたつて、俺らに半分くれるわけぢやなしよ、こちとらの掘るだけ掘つて金を貰ふんだ』と云つて理窟を云ふ者もあつた。そんな時に新吉が一番困つてしまふのであつた。

『きつと僕達が責任を持つて稼がせるからね、もう少し辛抱して見て呉れい』とさ

う云ふより外に仕方がなかつた。

或る日新吉が、三號坑内を見廻つてゐたときであつた。その坑道の上部の方に銅堀切端と云ふのがあつた。それは鑛石にかゝを堀らせて一箱幾らで買ふと云ふ請負の仕事であつたが、その切端に居るべき坑夫がゐなかつた。さうして同じ坑内の土山に近い所であるために、一つには危険でもあるし、又、土山が抜けると、雨降りるときに坑内に水が流れ込むのを恐れて、禁めてある場所があつた。そこから鎚の音が響てきた。新吉は眞黒な坑道に、たゞ一本かゝつてゐる、丸太の下駄梯子を登つて、階段に出て、

『おーい、階段の上を掘つてゐるのは誰だ』

と怒鳴つた。鎚の音はバツタリと止んで、四邊は森としてしまつた。彼はまた、

『おーい、下りて来ないか』と怒鳴つた。それと共に、眞黒な梯子の上から、大きな石が降つて來た。彼は坑夫がわざと石を落すのではないかと思つて、わきの方に身

をひそめた。そこへだん／＼にカンテラの光を見せて、蒼い顔をした坑夫が降りて來た。それは伊藤と云ふ坑夫であつた。が、彼の前に立つと、頭を搔いて泣き出しさうな顔をした。

『どうして自分の仕事場にゐないのだ。盗み堀をしちやいけないぢやないか』と新吉はいきなり怒つた。

『だつてお前さん、おれの仕事場と來た日にや、カチン／＼で固くつて堀れやしななんだ。いくら見張へ行つて銅代を上げて呉れつたつて上げてはくれないし、俺ら本當に困つたから……』と云ひながらまた頭を搔いてゐたのであつた。伊藤が女房持ちで、子供の産れさうな事も彼はよく知つてゐた。

『あすこの仕事場は危いんだぜ。土山に抜けたらお前が怪我するんだ。盗み掘りをした者は、下山させられ、位の事は知つてゐたらう』

『こりや誰だつて知つてゐるけど、どうも矢つ張り……』と云つた切りで、又頭を搔

いて黙つて了つた。新吉にも、何も云ふことが無くなつた。彼は黙つて、暗い階段を下つて行つた。下駄梯子を下るとき、上の方で伊藤がこそくと道具を片附ける音が聞えてゐた。

五

冷たい小雨のしよぼくと降る日であつた。それはやがて雪になりはしないかと思はれる程、寒い日であつた。坑夫が入坑してから三四時間経つてからも、上の方の坑内からは、何處からもハツバの音が聞えて來なかつた。そして鑛量係からは、銅掘の鑛石が少しも出て來ないと注意して來た。

新吉は直ぐ鑛量係に出かけてみた。そこにはいつでも小舎の中に堆積してあつた鑛石が、もう半分程減つてゐた。そしてその係員の松本は、箱番の中で股火をしながら退屈さうに、降りそゞいで來る雨を眺めてゐた。

「銅掘からちつとも來ないつて本當かい」と新吉はわかりきつた念を押した。

「今朝から二箱か三箱しか來ないんだ。奴等遊んでゐるんだぜ」

松本は薄い髭をひねりながら答へたのであつた。

新吉はすぐに山の上腹の方へ登つて行つた。冷たい雨がしとくと彼の現場着を濡らした。赤土の道は丸太で足止めがしてあつたが、それでも幾度かすべるのであつた。慣れたとは云ひながら、此の道を重い鑛石を脊負つて駆け降りる堀子の事を思はずに居られなかつた。

新吉はだん／＼登つて行くと、銅掘の坑口から、白い煙の立つのを見た。そして彼の姿が近づいた時、小さな堀子が五六人、慌て、坑内へ逃げ込んだ。筈の尻當てを腰のところでぶら／＼させて、屈みながら驅けて行く姿が、新吉には何んとなん可笑かつた。

彼は先づ銅掘一號坑へはひつて見た。鑛脈だけ辿つて掘り込んだその坑内は、何十

丈と高くそして狭かつた。その途中に、松丸太の留木を並べて、両側から山の壓して来るのを防いであつた。ところ／＼狭くなつた場所は、身體を横にしなければ通れない程であつた。赤ちやけた硃石の突き出たのが、あせつて通る彼の顔にとき／＼打突つた。新吉は奥の方へ進んで行つた。けれどもそこには毎ものやうに、ダイナマイトの煙も、カンテラの油煙の臭もこもつてゐなかつた。彼れは今朝から坑夫が一度も仕事をしないのだと考へた。

突立に行つたとき、さつき逃げこんだ堀子の一人が、それでもジョリンを持つて、ありもしない岩片をかき集めてゐた。堀子は特に自分のゐる坑内へ、はひつて來られるのを迷惑するやうな顔をしてゐた。

『おい坑夫は何處へ行つた』と新吉はいきなり脅すやうな調子で云つた。

『何處さいぎやしたか』堀子はやつぱり白ばくれてゐた。

『坑内で焚火をしたのはお前だろ』

『へえ』

『さつき逃げた奴をみんな呼んで來い』

堀子は大急で先きに立つて怒られるべき仲間を呼びに行つた。そして上下左右に並んでゐる坑口から、

『おい、みんなこー』と怒鳴つた。狭苦しい坑口から、小さな人足は一人々々に現はれた。彼等はてんでに空の背負箱を背負つたり、ジョリンを携へたりしてゐたのであつた。そして新吉の前に並んで、誰れもその焚火を困つたやうな顔をして眺めてゐた。

『おい、お前達は坑口で焚火をしちやいけないと云ふ事を知らないのか』と新吉が云ひ出した。

『へえ』と云つたきりで彼等は顔を見合せて黙つてゐた。

『坑口で焚火をすりや、中の空氣が氣滯で、人死が出来るやうなことになるんだぞ』

と諭すやうに云つた。

『だつて中さ誰れもゐねえんだもの』と一番年下の庄吉と云ふのが高慢らしい顔をして云つたのであつた。新吉はそれを聞くと、可笑しくなつて笑ひ出した。そして、『人がゐないつて、お前達も好い氣になつて遊んでゐたのなら歩を引くぞ』と云つた。堀子等はみんな困つたやうな顔をした。

『庄やんが餘計な事を云ふからだ』と誰れかゞ小聲でつぶやいた。

『馬鹿云へ、庄吉が云はなくつたつて判つてら、お前たちは、二號の堀下げへ行つて水でも汲んでろ』と云ひ捨て、新吉は又山道を下つて行つた。

六

雨の中を歩いた爲めに現場着は濡れて寒くなつた。新吉はそれを乾かさうと思つた鍛冶場の中は分けて暗かつた。爐の中の火ばかりが、赤い燐を吹いてゐるまわりに

銅堀の坑夫が五六人、輪を作つて無駄話に耽つてゐた。彼等が朝から仕事をしないのは、その側に置いてある道具が少しも汚れてゐないのでも分つてゐた。しかし彼等は彼等は新吉がはいつて來たのをみても、堀子のやうに逃げやうともしなければ困つた顔附きもしなかつた。たゞ一寸不愉快な表情をして皆黙つて了つただけであつた。

新吉も嫌な所へ來合せたと思つた。彼等が入坑しない事については、あとで飯場頭を呼んで、よく話をしようと思つてゐたのであつたが、目前にその怠けてゐる所を見れば、彼れも亦何事かを云はなければならなくなつた。

『君等は何んだつて遊んでゐるんだ。仕事もしないで工賃ばかり上げろつて云つたつて、そんなことが出来ると思ふか』と、彼は又た怒鳴らなければならなかつた。

『遊んでゐる、遊んでゐるつて云ふけんどねえ旦那』と山本と云ふ坑夫が、輪の中からにじり出した。

『わつしらの何にも遊んでゐたくつて遊んでゐるんぢやねえんでさ、いくら稼いだつ

て稼いだつて、此の頃の銅代ぢの借金まがかりになるばかりでさ、飯場でおかづ一皿食や十錢もとられるんだ。こんな稼ぎぢやお前さん菜どころぢやねえ、カンテラの油だつて貰ふ事お出来やしねえ。だからさつきから兄弟達と、色々相談してゐたところだ」
と煙管を持つた片手を突き出して云つたのであつた。

「さうよ、山本の兄弟の云ふとほりよ、借金をこせえるために、石蓋を被つて危ねえ思ひをして働くことあ、ありやしねえや、馬鹿にしてやがらあ」と鈴木と云ふ坑夫が續いて云つた。その男は二號飯場頭の兄弟分と云ふのを鼻にかけて、平素からさこちなく生意氣なことを云ふ男であつた。新吉は彼等の云ふことは決して無理のない事だと思つた。現に鑛主は鑛況不振と云ひながら坑夫が十人もかゝつて一月に稼ぐ程の金を、一晩に使ひちらして遊んでゐることを、五六日前東京から歸つて來た後藤が羨ましさうに話したのを聞ひたばかりである然。しまた新吉の立場としては、坑夫の横着な態度や、分けてその鈴木の突拍子な物の云ひ振りが癪にさはつた。しかしかれは、

「まあ、だから、もう少し辛抱し、呉れつて云ふんだ。少し切端が直りさへすりやきつと今迄のうめ合せもするし、又た君達が稼いでゐてさへくれれば、稼ぎの少いのは本番に直してやるから、僕は責任をもつてきつとやつてみせるから」と一生懸命にその責任をもつてうめ合せをすることを、説明しようとしたのであつた。

「へん、本番だつてお前さん、幾らなんです。四貫や五貫の錢を貰つて、飯場で飯が喰へますか、人夫だつて氣の利いた奴はもつと稼いでら」と鈴木が云つた。

「だから僕が責任を持つて、君達にうめ合せのつくやうにするつて云ふんぢやないか」

「何しろ此處の現場員なんて、判らねえ奴ばかりなんだ。俺達に脱走でもしなきやならないやうな事をしやがりや、構はねえから叩つ殺してやるから」と突つ立ちながら、その少し突き出した下唇に冷たい笑を浮べながら云つたのであつた。

「なにつ、たゝつ殺すた何んだ。俺達がこれだけ責任を持つてきつとうめ合せをす

ると云つてゐるのに、たゞつ殺すとは何んだ。貴様達にそんな脅しを喰つてびく／＼してゐて、こんな山ん中にきてゐられるか、たゞつ殺すならたゞつ殺して見ろ」と我慢のしきれなくなつた新吉は、いきなり鈴木に身體を突きつけた。どの坑夫も皆んな黙つてしまつた。そして鈴木は

「なにもお前さんをたゞつ殺すつて云やあしねえ、判らねえ奴はつて云つたんぢやねえか」と鈴木は新吉の見幕が餘り激しいので、ぐづ／＼と云ひ抜けやうとしたのであつた。新吉にはそれが更に不愉快だつた。彼れはこの卑怯な高慢ちきな人間から、こんな侮辱を受けるのは、最大の耻辱だと思つた。そして頭の中が煮えるやうにくらく／＼とした。

「そんなら何故人の前で殺すなんて云つたんだ。殺すなら黙つて殺せ、この意氣地なし野郎」と云ひながら、彼れは半ば夢中で鈴木を横面を、力まかせに擲りつけた。

「なにを、やつたな」と、鈴木はいきなり武者振りついた。二人は揉み合つてゐた

が、やがて、鞆の中に火のおこつてゐる上に横なぐれに倒れて了つた。

七

「あつ、危ねえつ」と、その時やうやく山本が止めに来た。そして

「兄弟、喧嘩したつてしようがねえからよせよ」と先づ鈴木を押へた。柔らかい松炭ばかり使つてゐたために、二人は怪我もしなかつたが、横顔は眞黒になつて、髪の毛は少し焼けてゐた。外の坑夫達は黙つて周りを取り巻いてゐた。

「馬鹿野郎、口惜しかつたら歸りに幾らでも喧嘩してやるから、飯場のとこで待つてゐろ、裏山へでも何處へでも行つてやるから」と新吉は、片頬を黒くした、鈴木を顔を見つけて怒鳴つた。

「何を云つてやがるんだ。てめえたちの一人ぐらゐたゞつ殺すな朝飯前だ」と鈴木もやり返した。

「なにつ」又新吉が飛びかゝらうとしたときに、周りにゐた坑夫が抑へてしまつた新吉は袋たゞきになるのではないかと思つた。

そしてそこにある大きな鎚を取り上げた。その時この騒ぎを聞きつけた、鈴木や飯場頭の萩野が見張りから駆けつけて来た。萩野は、

「何をしたんだ。馬鹿野郎つ」といきなり鈴木に怒鳴りつけた。

「萬次郎、おめえまた生意氣云つたんだろ、こないだから、おめえは怠けてばかりゐて、こんだ仕事しなかつたら下山させると云つとるんだ。萩野君、之れから勘定してやるから萬次郎、下げておくんせえ」と同じ姓の鈴木は、萬次郎と呼びながら、萩野に云ひ渡した。

「本當にしよがねえ奴だ、どこへ行つてもさわざばかり起しやがる、腕も出来ねえくせに」と萬次郎の兄分になる萩野は、小言を云ひながら連れて行かうとした。

「いやしかし今日のは初め僕が撲つたんだ。こん畜生が餘り生意氣なことをぬかし

やがるから」

と新吉は下山させられると聞くと、彼は自分が悪かつたやうにも思ふのであつた。

「なに構ふ事あねえす。一人位下山させなきや、この頃はみんなつけ上がつてゐるから構はねえでおいといた方が好いだ」と採鑛係の鈴木は、もう下山ときめてゐた。

鈴木は顔を半分眞黒にしたまゝで、萩野に連れられて山を下つて行つた。そしてその時になつて、ほかの坑夫達は鑿や鎚を擔いで黙つてコソ／＼と、仕事場の方へ行つて了つた。新吉は冷たい清水で顔を洗つて、見張へはひつたが彼は奇妙な昂奮と、不安を感じてゐた。

氷のやうな小雨は、まだ陰氣らしく降つてゐた。彼れはその昂奮を静めやうと思つて、机に兩肘をついて、曇つた窗外を眺めてゐた。寒さうな霧は、向ふの山の方まで冷かに立ち籠めてゐた。そしてしばらくすると、上の方の銅堀の坑内から、鑛石を擔ひだ小さな堀子が、兩手を組んですべる道をふみしめ／＼下つて來るのが見へたので

あつた。彼はそれをみてゐると寂しくなつた。侮蔑や悲哀や同情や憤懣が頭の中で入り亂れて、もやのかゝつたやうになつて了つた。

銅堀の仕事場を見て來たらしい、採鑛係の鈴木の姿も、雨の山道に現れた。消したカンテラをブラ下げて、首をすくめて、だんだん下つて來た。そして見張りへ入ると「井上君どうもしなかつたか、あの馬鹿野郎おらとは職の上では甥になるんだけれど、生意氣な野郎つて、しよう事のねえ野郎だ」

と、もとは坑夫であつた鈴木は、自分の身内の不始末を、あやまるやうな調子で云つた。「どうもしやしないよ。だけどあれは、僕の方がさきに擲つたんだからね」

「なに構ふ事があるもんか、あの野郎は堀子の時分から生意氣で困つたんだ。俺の兄弟分が子分に持つたんだけど、どこの山さ行つても理屈ばかり云やがつて」

「理屈を云ふつて、本當は向ふの理屈の方が好かつたんだよ。ただあんまり人をなめたやうなことを云ふから僕は癩にさはつたんだけど、五分と五分なら向ふの方が勝

ちなんだ。鑛主なんか鑛況不振鑛況不振つて云つて、自動車へ乗つて待合遊びばかりしてゐるんだからな」

「そりやほんにさうよ、だけど、今まで山の景氣が好すぎたもんだから、素人は仕方がねえす、それに俺ら坑夫の肩持つと、あいつは昔坑夫だつたからつておきに云はれるから」

「それで鈴木はやつぱり下山ときめるかね」

「どうも一旦云つたもの仕方がねえから、さうして外の坑夫の見せしめにもならねえからな、何かにあんな奴は鐵砲虫で、喰つて通るだけだから、どこへ行つたつて困りやしねえ」

新吉は餘り坑夫の鈴木をかばふと、自然が復讐を恐れでもするやうに思はれるのがいやなので夫れつきり黙つて了つた。

坑道の水平を測る小さな機械を手にして歸つて來た松永は、

『どうした君、えらい喧嘩をやつたねえ』と新吉の顔をみるといきなり云つた。

『なかに、つまらないことなんだよ』と、新吉はもうそれを聞くのもいやな氣がしてゐた。

『しかし君、今夜は君は宿直ぢやないんだな、氣をつけないと、あんな奴は、何をするか判らないからね、氣をつけないといけないせ』と年長らしく心配氣に云ふのであつた。

『あゝ有り難う。何に大丈夫だよ。あんな奴位』と云つたが、新吉にもその恐は多少あつた。奴等が多勢してやつて來たら、幾ら力んでもかなふ事ではないのである。夫れかと云つて逃げるのは尙更嫌であるし、何うせ氣の荒い坑夫相手にしてゐれば、

八

こつちも生命がけでゐなければならぬ事だと、無理に覺悟をさめて見たのでもあつた。

『然しなんだね鈴木君、こんなことをしてたら、奴等は何か初めるかも知れないせ』と松長はこんどは鈴木に云つた。

『やるなら何んでもやるが好いや、俺ら、そんなことは何うでも好い、素人の鑛主のところにりや、何うせ、せうもねえこんだ。何處の山だつて初めたてには、みな喰ひ込むけど、この山なんか未だ喰ひ込んだこともねえに、矢釜しい事べえ云つてるんだ。いまに何か始まつたら目でも醒めべえよ。俺らあもさんざやつて來たこんだエ』と云つて、澄しかへつてゐた。

『しかし變な事をやられちやあこつちが堪らないからな、足尾の誰れかみたいに赤インキでも浴びて、縁の下にもぐり込むやうになつちや遣りきれないよ』松永はニヤ／＼笑ひながら云つた。新吉は黙つてゐた。が彼は又立つて、窓の外を眺めた。雨は

同じやうに降つてゐた。銅堀から鑽石を運ぶ堀子は、細い道をゆづり合つて、蟻のやうに動いてゐた。小使が晝を知らせるベルを鳴らしたので、撰鑛場から響いて来る碎鑛の響も、一輪車のキシミも止んだ。方々の坑内でかけた午の上りハツバの響きが、幾つもつゞいて陰氣な空気を動かして雨空の中へ消えて行つた。

午飯のときは、三人とも黙つてゐた。新吉は殊に昂奮した顔をして、さつさと飯を食つてしまつた。

彼等が漸く煙草を吸ひ初めたところへ、撰鑛係の安部がはひつて来た。背が低くつて、丸く太つたところが、彼が少年時代からの主人である鑛主に似てゐると云はれてゐる此の男は、兩手をポケットに突込んだまゝ、少し反身になつて、爐邊りに立つたつて、身體を二三度ゆすつた。それは彼が唯一の崇拜者である鑛主の身振りと同じやうであつた。そして彼もまた何か昂奮してゐるやうに目を据ゑて、あたりを見廻してから、

『鈴木君』と鋭く云つた『鑽石がちつとも出て来なくつて困るね。僕の方ぢやもう少したつと、皆な手をあけて遊ばさなくちやならなくなるんだ。困つちまふね』と云つた。

それは恰度鈴木や採鑛係のものを叱責するやうな口調であつた。鈴木は一寸顔色を變へたが、

『ようがす俺らの方ぢや出来るだけ一生懸命に出さしてゐるんだけど、出ねえもんしよがねえな』と強ひて冷やかに云ひ放つた。

『出ねえもんしようがないなんてそんな無責任なこつちや弱るぢやないか、僕の方ぢやもうぢきに碎鑛の材料がなくなつちまふんだ』

『さう云つたつてしよがねえつて事よ、人の手でこせえた山ぢやなし、斷層が來たり岩が堅くなりや鑽石だつて出なくなる、それも三の番でも入れてどしどし稼がせりや知んねえことを、やれ稼ぎが餘計になるの、鑽石が尠ねえのつて、俺らの方で何う

なるもんか』

『そりや君の方はさうかも知れないけど、僕の方ぢや、人を遊ばせておくわけには行かないし解雇すればあとで困るし、何とかして出して呉れなきや困るつて云ふんだそんな暢氣な事を云はれちや困るぢやないか。一體君等暢氣すぎるんだ』安部は弱つたやうな怒つたやうな顔をして、腕を振り廻して云つた。

九

『暢氣た何よ、君の方こそ何でねえか、少し位おひまになつたら、人足に岩片でも片付けさせたら好いでやんしよ』と鈴木はわざと落附いて揶揄ふやうに云つた。

『岩片の片付け仕事なんか、採鑛のこつちやないか、僕の方ぢやそんなことは出来やしない』

『採鑛だつて選鑛だつて、おんなじ山の仕事でねえか、何をしたつて、おんなじ鑛

主が金を出すんだに』

『さうは行かない、僕の方では無駄に人を使へば僕の方の成績にかゝわる』と安部は傲然と云ひ放つた。

『成績つてなんのこつたい、成績つて、え？』とその時新吉が、大きな聲で云ひだした。

『君の成績つて云ふのは、出せない鑛石を、無理に出せつて云ふことか、こつちだつて、鑛石が出したくつてしかたがないんだけど、土山を堀つたり龍頭を外せば、あの仕事が出来ないから困つてゐるんだ。それに何んだい、暢氣だの何んだのさんざ文句を云つた揚句に、こんだお自分の成績だつて云やがらあ、馬鹿野郎め、餘計な文句を云つてゐる暇に、カンテラでもぶら下げて、坑内でもよく見て来てみる』とさつきからの昂奮のまだ納らない彼れは、安部に飛びかゝりさうな形をした。

『君は何か、僕と喧嘩をしようつて云ふのか』と威張る割に氣の弱い安部は、もう

涙を一杯ためて云つた。

『喧嘩がしたきや喧嘩だつて何だつてするさ、一體君の云ひ草が癪にさわるんだ。威張りくさつて人の方へ来て文句を並べて何うするんだ。さうして陰へ廻つちや下らない事を東京へ書いてやりやがる。君の成績つて云ふのは賞與でも澤山貰ひたいこつたらう』と彼れは腰をかけてゐた椅子をすり出して怒鳴りつゞけた。

『そんなバカな、そんな事を云ふもんぢやないよ。たゞ僕の方は人を遊ばせとくのが困るつて云ふんぢやないか』

『だから岩片かきでもなんでもやらせりや好いつて鈴木君が云ふんぢやないか、さうすれば君は成績だなんて云ひ出すんだ。わからない男だな』

『まあ好いに、成績をよくしたい者には、さうして心配させたらいいだ。いくらあせつたつて出ねえ鑽石は出ねえだから、また俺ら方も精々出すから、安部君はまあ選礦へ歸つてゐなんしよ』と鈴木はニコ／＼と取做すやうに云つた。

『安部君もまだ若いからつい暢氣だなんて云つたんだらうけど、こつちも随分心配してゐるんだ。井上君なんか、さつきも鈴木萬次郎と取つ組み合ひまでしたんだからね、まあお互にさうして一生懸命にやつた方が、山の成績は本當によくなるんだらうから』とその時始めて松永が云つた。

『僕も成績なんて何うだつて好いんだ。自分が癪にさわつたから喧嘩したんだ。どうだい、成績なんて何うだつて好いつて云つたつて金澤（鑛主）の細君にでも報告してやれよ。喜ぶせ』と新吉はまた安部に突つかゝた。

『報告つて、いつ僕が報告なんかしたい』

『いつしたか自分に聞いてみる、人を欺すことは出来ないだろ、卑怯な野郎だ』

『まあ好いから、安部君は撰鑛係へ歸つてゐなんしよ、またあとでとつくと話をするから』と鈴木は安部に出て行くやうにすゝめた。

『ちやなるだけ鑽石を出して呉れ給へ、井上君、報告なんて云つたのを忘れ給ふな』

と捨てせりふを云つて立ち上つた。

『餘計な事を云はないで、自分の胸に聞いて見ろ』新吉はまだ罵つてゐた。安部が出て行つてしまふと、

『井上君、今日は君幾度も腹を立て、疝をおこしてゐるから早く歸つたら何うだすこゝさ下つて一杯やつたら氣持が好くなるべえ』と鈴木がいたはるやうに云つた。

『有り難う。なゐに大した事もないんだけど下らない事ばかり云やがつて癪にさはるもんだから』

『だから歸りなんしょ。歸つた方が好いに』

と鈴木は幾度もすゝめた。

『なに好いよ天氣でも好けりや山の上へ行つて、大きな聲で怒鳴りでもすりや清々するんたけど、雨はふりやがるし、本當にくしやくゝすら』と云つて、新吉はぢつと何かを考へてゐた。

しばらくしてから鈴木が、

『歸つた方が好いに、さうして飯場の前を通らないで、梅の澤の方さ廻つて行きなんしょ』

と又すゝめた。

十

『夫れぢや失敬して、さきへ歸らしてもらはうかな』と云つて、新吉は歸り支度を始めた。毎日抱へて来る本の包を持つて彼が見張りから出ようとしたとき、

『梅が澤を廻つて行つた方が好いだ』と鈴木が云つた。

『なゐに構やしないよ。向ふだつてやるつもりなら、なにも今日に限りやしないよ』と云つてから、新吉は、

『クロ、クロ』と呼んだ。雨が降るので、縁の下にはひつて退屈さうに寝てゐた犬

は、すぐ飛び出して来た。さうして首を伸ばして、濡れた道をよぼよぼと氣持悪さうに小走りに走り出した。

撰鑛場の前を通るとき、新吉はひよいと中を覗いて見た。けれど安部の姿はどこへ行つたのか見えなかつた。

麓の澤の片側に飯場と坑夫長屋が並んでゐた。その上の方の長屋のはづれには、一號飯場があつた。その飯場の横から山道へ登ると、梅が澤を抜けて、村へ歸る道がある。けれどもそれは確に本道よりは三分の一位の違つた。新吉が下つて行つた時は、撰鑛場に出てゐる女達がまだ歸つて來ないのと、寒い雨の降つてゐるために、いつもざわ／＼してゐる長屋の前にも人氣はなかつた。そして何の家も障子をしめきつて、小雨の降りそゞぐ往還には、切れ草鞋や尻當ての古いのが、寒さうに散らばつてゐた。一號飯場のはづれの、そこから梅が澤へ續く道へ來たとき、彼れは立ち止つてふと思案に耽つた。けれども『どつちしたつて同じこつた』と呟いた。

向ふでやる氣なら、今日逃げた所でいつかはやられるのだ。さうしてそんな弱腰をみせたら最後、彼等はどこまでつけ込んで來るか判りはしない。何うせこんな山の中へ來て、氣の荒い坑夫を相手にしてゐる限りいつも石蓋を被つて暮してゐるのと同じことだ。

知らない中に落磐して、潰されて死ぬ奴も怪我する奴もある世の中だ。争ふのなら生命がけの争ひが好い。來るなら來てみる。彼は元氣を出して歩き出した。が又た、『クロ、クロ』と呼んでみた。クロは直ぐに彼れのそばに走つて來て、濡れた頭をズボンにこすりつけた。

『よし／＼』と彼れはその頭を撫でた。

『犬でもちつとは加勢してくれるかも知れない』と彼れは考へたのであつた。そして外套のかくしの中で、いつも持つてゐる七首の柄を固く握りしめて二號飯場の方へ歩き出した。

犬は彼れの少し前に、又た首を伸してしよぼ／＼と歩いてゐた。彼れは一軒一軒長屋の中を注意して歩いた。しかしそこでもやつぱり、障子は閉め切つて静かな人聲が時々洩れて来るだけであつた。飯場を通るときに、彼れは殊に用心して中を覗きながら歩いた。二の番の坑夫たちは、雨に降り籠められて、垢臭い蒲團を被つて暗い部屋で寝てゐたのであらう。珍らしく森として、前に落ちてゐる笥の水音ばかりが佗しげな音を立てゝゐた。

その前を通り抜けた時、彼れはほつとした。さうして今まで力んでゐたことが、何となく滑稽にさへなつて來た。

『向ふではやつぱりそれ程根深い悪意をもつてゐたのではないのだ』と思ふと、自分の臆病が耻しくさへなつた。飯場の下の澤合には、人夫の作つた茅小屋が立ち並んでゐた。

それは人間の住む家と云ふよりも物置小屋のやうであつた。獸物でさへその中には、

飼つて置けまいと思ふ程粗末な貧しい小舎である。茅で葺いた家根や羽目の間からは、青紫の煙がもく／＼と流れ出て、小雨の中をゆるく漂つてゐた。クロはその小舎を一つ一つ嗅ぎながら、小走りに走つてゐた。新吉は何事かを考へるやうに俯向いて、のろ／＼と歩いてゐた。

人夫小舎かはもう餘程離れてゐた。だん／＼深くなつた澤合は暗くなつてゐた。凡てが寂しくそして寒さうであつた。張合ひの抜けた、争ひの後の寂しさが、新吉の頭にもじく／＼と喰ひ込んだ。

十一

新吉が此の山に來たのは、去年の暮の押し詰つた廿八日であつた。彼れはそれより一と月程前に相場をして何度目かの失敗をして了つた。彼れはそれまでも幾度失敗して、母親に迷惑をかけた事だか知れなかつた。いや相場が好きと云ふよりも、夫れ

に依つて遊ぶ事が好きであつたのだ。彼れはいつでも相場をしてうんと儲けたら、ちつとして本でも讀んで暮したい。と思つて始めるのであつた。さうして少しづつ儲けると、彼の若い血と日々の空虚な生活が、彼をちつとはさせて置かなかつた。毎日々々單調なことを繰り返す、相場の高下に腐心して頭を疲らせて歸る頃には、何か華やかな刺戟が欲しくなつた。儲けた金は生活の安定どころか、右から左へ消えて了つた。そしていつも薄弱な資本で危い綱を渡つてゐる中に、損失が來ると彼れの手には何にも残らなかつた。今までそれは幾度か繰り返された事である。

その時も失敗して了つた彼れはその頃切り詰めた生活をしてゐた姉の家の狭い部屋に閉籠つて、蒼い顔をして溜息ばかりついて爲す事もなく暮してゐた。その姉は彼れの姉妹の中では一番氣質の優しい純な女ではあつたが、日々に追はれるような苦しい生活の中に、大きな男にごろ／＼してゐられることは、義兄の手前ばかりでも、どんなに心を苦しめたか知れないのであつた。

「新ちゃんだつてもう好い加減眞面目になつて何とか働らいて見たら好いぢやないの」と時々いやは顔をして云ふのであつた。

『僕だつて何かしたいと思つてゐるんだけど』いつもさう云つては今まで眞面目に働いた日の事を思ふのであつた。

少年の時小僧に出てから二十四になるその年まで働き通しに働らいて來たのであつた。彼れは何軒も小僧に歩いてから、書生もした。職工にもなつた。汽罐人夫にもなれば電氣工にも、牧夫にもなつた。殊に十七八の頃は労働神聖熱に浮かされてゐた。自ら進んで電氣の外線工にもなつた位であつた。けれどもその後でも彼れがやつて見た労働は神聖でもなんでもなかつた。日に焼けて眞黒になつて働いて、夜は夜で歸れば本一冊見る暇もない程疲れて眠るだけの事である。

労働と云ふ事は、人間が人間離れをして道具となつて了ふことである、とその時つくづく感じた事であつた。槌一つ鍬一つ握つたこともない彼れの先輩が、

「さうして働らいて疲れて眠るのが本當に尊い人生なんだ」とよく彼れに云ひ聞かせたのを眞赤な嘘として、嘲笑するようになってゐた。

紫檀棹花欄洞の三味線と刀劍を秘藏にして、常盤津を名人と云はれる程語つた、江戸末期の士であつた彼れの祖父の血が、母親を通じて彼れの身體にもめぐつてゐた。彼れはだんだん若い身空に戀も知らずに働らいて、よしそれで成功したところで、夫れは何んだと思ふやうになり初めた。十九の時に新吉は相場をすることを覺えたのであつた。彼れは少年の頃には世の中に、藝者ほど美しい者はないと信じてゐた。その奉公先の若主人が、道樂者で、藝妓屋にやられる度に、どんなに喜こんで行つたかしのれない事であつた。

勞働神聖の夢が破れて、初めて相場を覺えて金を握つてからは、彼れはもう專念に遊蕩の中に没頭した。しかし資本の薄い彼れには夫れも長く續かなかつた。母親にさんざん心配をかけた揚句、寂しい流浪と勞働とは又始まつた。然し神聖と云ふ氣の抜け

てからの勞働は、ただく苦しく物憂いばかりであつた。大阪の高利貸の家に使はれてゐる頃に南の新地の橋際で、二階から洩れて來る地唄の三味線のゆるやかな響きに聞き惚れて、思ひ切つて藝妓家の男衆になつて、淫蕩な音樂と美しい女の中で、一生を醉生夢死で送りたいと思つた位であつた。

十二

「何か働らいてみたらどう」と云はれてもまたその姉の苦しい生活の姿をみても、新吉は再びあの苦しい勞働をする氣には容易になれなかつた。さうして彼れは自分の好きならのでと、色々考へてみても、戀をすることや小説を読むことや、酒を呑んだり遊んだりする事の外に好きなことのない彼れには、飯の種になるやうなものはないかつた。

殊に彼れが唯一の金儲けの方法である相場は、親戚も知人も蛇蝎のように嫌つてゐ

たから、彼れはその資本を得べき道はなかつた。現にその時も、大阪から歸つて來ると共に、新吉は知己を頼つて自分で牛乳屋を初めて配達した。そして晦日に集めた金を相場と女で失くして了つた爲めに、卸屋からは毎日のように牛乳代を催促に來てゐたのである。彼れは自分の無能を呪つた。世間では天職と信じていると、その職務に勵んでゐる人があるのに、彼れにはその何物もないのであつた。

新吉が毎日その三疊の薄暗い部屋に閉ぢ籠つてぐづぐづと暮してゐる中に、母親ばかりは熱心に心配し始めた。

『あなたがいつまでも世話するから、あの子が好い氣になつてゐるのですよ』母親の妹である新吉の叔母は、いつも母親に云ふのであつた。けれども母親には、その叔母の忠告も、新吉とは仲の悪い惣領娘の冷笑も、新吉に對する愛を増す種となるばかりであつた。

『お前さへ好くなつて呉れれば、私は肩身が廣くなるのだから』と連つ子で、あ

るやうに新吉を庇つたり勵ましたりするのであつた。さうして或る日母親は長い間無沙汰をしてゐた、遠い縁類の金澤の家に、新吉の爲めに金を借りに行つたのであつたその時金澤が、

『丁度自分の方で鑛山を始めたから、そこへしばらくやつて置いたら好いでせう』と云つたのであつた。母親は途中で電車に衝突かりさうになつたのも知らない程喜んで家へ歸つて新吉にその事を話したのであつた。

『僕も餘つほど神経が疲れてゐるようだからしばらく山へ行つた方が好いでせう』と云つて、新吉は山へ來る事に定めたのであつた。そして行詰つた歳の暮の、賣出しの旗でどの町も飾られてゐる東京を、夜逃げをするやうに逃げて來たのであつた。その頃彼れは、一つ違ひの姉から貰つたエピクテタスの教訓と云ふ本を愛讀してゐた。物質的に失敗した彼の心には、その唯心的な、虚無的な消極な訓言が、水のように滲み込んで、枯れ切つた荒んだ氣持を濕して呉れるやうに思つたのであつた。彼れは今

までの経験で、多勢人の集つてゐる處には、きつと何か渦巻の出来ることを知つてゐた。

こんど山へ行つたら、そんな渦巻の中へは巻き込まれないやうに、何うせ自分は鑛業家にならうとは思はないのだから、自分の仕事だけをきちんとして、自分だけは別になつて、静かに自分を養つて來ようと、上野から汽車に乗る時もさう考へてゐたのであつた。

新吉は又た老莊の書物や寒山拾得集などを携へてゐた。その時の彼れは、少年の頃からのあこがれでもあつた、仙人の修業でもするよゝな氣でゐたのであつた。

山へ來てから何にも様子の判らなかつた一と月ほどの間は、その無關心も通せたのであつたが、いつかまたその渦巻きに巻き込まれてお先棒になるよゝになつて了つてゐた。さうして安部が何か通信してやつたやうだとか、鈴木が坑夫にどんな事をしたとか云ふことを、大變なことのやうに論じ立てるよゝになつてゐた。またそんなこと

をでも話をしなければ、この狭い山の中にははかに話の種もなく、またあつたところで外の話に興を持つ人もないのであつた。新吉は、ときどき、之ではいけないと思つて、愛誦してゐた寒山拾得集を繰り返したりして、強ひて超然としようと思つたが、結局そんなものはなんにもならなかつた。

十三

「それ、何うも仕方のないことだ。然し今日は何だつて二度も喧嘩したのだらう」小高く廣い峠の上を歩きながら、彼はふと呟いた。細い冷たい雨は、向ふの山の上にも谷間にも、煙のやうにそゞいでゐた。さうして洋傘をかつぐよゝにさしてゐた新吉の帽子も外套も、じめ／＼として肌寒くなつてゐた。

初め坑夫と喧嘩した時でも、彼等の云ふことは、もつともだと考へてゐたのだ。それに又、自分が幾ら責任をもつと云つたところで、自分が金を出すわけでないのだから

ら、彼等が、不安心に思ふのも無理のない事だ。稼いでも稼いでも、借金になる位なら稼がない方が好い。——それは當然すぎるほど當然な事なのに、さうして鑛主は引き合はないと云いながら、相當に儲けて、バカ氣な贅澤をしてゐることも知つてゐる癖に、喧嘩をしてみましたのであつた。

大體この鑛主と云ふのだつて十年程前にその細君が嫁に行つた頃には、巻煙草の内職か何かをしてゐたのである。さうしてその勤てゐた會社で、相當の地位に漕ぎつけたが、去年の春に會社の内部の醜態が暴露されたときに、重役は懲役に行き、今の鑛主は首となつた。さうして僅かの金で此の錫山を買つて、錫をふいてゐる中、どうしても溶解しない烏と云ふ厄介な鑛物が交つてゐるのに苦しんで、苦しまぎれにその鑛物の分析を監督署に依頼したところが、それがタングステンであると云ふことが判つたのであつた。それで大急ぎで探鑛を初めて、この露頭を發見したまでのことである。タングステンと云ふ鑛物の利用方法が解つてゐなかつたら、恐らく彼はそのタングス

テンの爲めに反つて破産して了つてゐたに違ひない。ほんの僅かな偶然の機會に出會つた爲めに、さうして偉い科學者がタングステンの利用法を發見して置いて呉れたために、鑛主は一躍して偉大な資産家となつて了つた。何萬年かの昔に、この地球の内部に何か變動があつて、厚ばつたい砂岩の中に硅石やタングステンを吹き上げたのだと學者は云つてゐる。然し自然にそんな變動があつたところで格別人間の爲めに利用するやうにと云つて、此の鑛物を吹き上げて來たわけではない。ただ人間が、その鑛物を人間達に都合の好いやうに利用する事を發見した丈けなのだ。そして鑛主はその發見の御蔭を偶然に蒙つただけなのだ。現に彼れが、この山を初めるときには、まだタングステンか、何だか知りもしなかつたのだ。

錫の中の烏が錫より貴いタングステンになつた爲めに、鑛主は立派な鑛山師になつて了つた。然し夫れを掘る坑夫の努力は烏だつてタングステンだつて同じことである。斷層の岩でも直りの岩でも、堅くも柔らかくも、努力は凡て同じである。だから彼等

の云つた理窟に違ひはないのだ。それなのに、何んのために争つたのか——そればかりでなく、そのあとでは、安部とまた、逆に鑛主に反抗するような態度で争つた。

初め坑夫と争つたのが、彼の本心なのか——それはつまらない感情の衝突である事は彼れも知つてゐた。然しその衝突をさせたものはなにか——鑛主の隠し目附と云はれる安部と争つたのが本心か——考へつめると彼れは結局、人間として人と争つたのではなくつて、採鑛係と云ふけちな職業のために、それは單に置かれた境遇のために譯もなく争つたことが彼れを寂しくさせたのであつた。

小雨の降る中を思ひに沈みながらうなだれて歩いてゐた。

その晩夜食をしながら、新吉は小西にその日の出来事をすつかり話した。そして、『つまらない事ですなあ、まかり違へば生命がけになる喧嘩をして、それかつてそれ程相手が憎らしい譯でもないんだから』と云つた。

『まあ好いさ、そんなに考へたつて仕方がないさ、それよかお互ひに早く好い鑛脈でも目附けやうぢやないか』と云つて、

『あはゝゝ』と笑つてしまつた。新吉もそれつきり仕方なしに黙つて了つた。

十四

その翌朝は、空は美しく晴れてゐた。さうして又春になつたやうに、ゆるやかな朝風が吹いてゐた。新吉は朝早く食事を済ますと、一人して現場に出かけた。クロも此の晴れた日を喜ぶように、まだ雨に濡れてゐる枯草の中を威勢よく駆けて行つた。山道の枯草の下には、眞赤なルビ一のやうなのや紫色の雑草の芽が吹いてゐた。

白い手拭を被つて、撰鑛場へ通ふ村の娘たちは、

『おはよう』と云つては彼を超越してどしどし登つて行つた。

飯場の前に来た頃には、日は既に山の上に昇つて、その往還に敷きつめた硃石が、雨に洗はれてキラ／＼と輝いてゐた。笥のまわりには長屋の女房達が集まつて、鍋や

釜を洗つてゐた。坑夫等は鑿や鈍をかついで、二三人づゝ組となつて、仕事に出掛けるところであつた。

新吉はその時、

「ひよつとしたら今朝は」と思つた。そして飯場の中を覗いて見た。頭役の住む方の部屋は、もう奇麗に掃除がしてあつた。さうして新しい簞笥の並んだのや、湯呑や猪口の澤山並んだ茶簞笥が往還に射した朝日の反射をうけて、派出々しく浮き出てゐた。そこで昨日彼れと争つた鈴木は、斜にした障子の前に兩膝をついて、障子を張つてゐるところであつた。新吉が覗いた時、鈴木はふと顔を見合せたが、直ぐに横を向いて了つた。新吉は、髪の毛を奇麗に分けてつゝ、まじやかに紙を當てゝゐる鈴木の姿を見た時、昨日あんなことを云つた男とは思へなかつた。彼はその恰好を、幾度か頭の中で描きつゝ、見張りの方へ登つて行つた。

午頃になつて頭役の萩野は、鈴木の評坐帳を持つて見張りへ來た。そして、

「今朝すぐ下山させるのか本當ですけれど、弟分になつてゐる奴の事ですから、まあ二三日遊ばせてから立たせたいと思つてゐます。あなた方に決して馬鹿な眞似はさせませんから、そのところをどうぞ一つ」と頭を掻きながら云つた。

「鈴木は今朝君んとこの障子を張つてゐたね、穏和しい恰好をしてゐたせ」と新吉が云つた。

「えゝ彼奴は氣は好い奴なんですけど、どうも口が生意氣でいつもやりそこなやがるんで、どうも」

「つまり氣が好いから喧嘩するんだよ。喧嘩も出来ない奴は、蔭で何かやるんだろしかし鈴木には氣の毒だつたね」と云つて、計算をした判坐帳を萩野に渡した。

「何あに、たまに下山ぐれえさせねえと、坑夫が癖になつていかねえんだ。なあ萩野君」と鈴木はそばから口を入れた。

「えまつたくさうです」萩野は仕方なしに笑ひながら行つて了つた。

三日程経つてから、坑夫の鈴木は朝早く、行李を背負つて見張りに来て、

「どうも御厄介をかけてすみませんでした」と丁寧挨拶をした。

新吉も、

「まあ大事にして行き給へ、また何だつたら歸つて来たつて構はないせ」と云つた

「え、有り難う御座います。さよなら」と云つて、鈴木は、峠を越えて行つてしまつた。

新吉は残り惜しいやうな氣がして、いつまでも見送つてゐた。

十五

新吉が見張りに宿直をした晩であつた。それは暖かい、人懐しいやうな夜であつた。彼は九時頃に坑内を一廻りしなければならぬ役目を済して、見張りに歸つて来た。何の坑内も、岩片は奇麗に片附いて坑夫は愚痴もこぼさずに仕事をしてゐるのが、彼

の心を喜ばせた。終日履き通して坑内の水でグチャグチャになつた草鞋と足袋をやつと脱いで、洗つた足を爐の火にかざして乾かしてゐた。暖たかな夜氣に窓の硝子はうるんで、ランプの光りを穩かに反射してゐた。クロは彼の足下に、丸くなつて眠つてゐた。時々新吉が、その足で毛を撫で、やつても、ちつとして動きもしなかつた。そこへ、

「ごめん下さい」と云つて、坑夫が三人這入つて来た。それは山越と高縁と工藤と云ふ世帯持の穩和しい、よく稼ぐ坑夫であつた。

山越は、山中大當番、と書いた提灯を消すと、

「どうも御邪魔して済みません」と云ひながら、

「さ兄弟、こつちやへ寄せて貰はう」と、襦袍の裾を穩和しく捲くつて爐邊にしやがんだのであつた。

「なんだい今時分三人もしてやつて来て、まあ腰をかけたら好いちやないか」と新

吉が腰掛をすゝめたので、彼等はやつと腰を下した。

「いや何んで、その又たちよつとお願ひに出たのですがな、わしが今月は大當番やもんぢやからわしがまわ出たやうな次第で」と口上を云つてから、

「なあ俺らが話すべえかな」とそばにゐる二人に諮つた。

「さうよ兄弟に頼むと云つて來たつてから、なあ工藤の兄弟」と高縁が云つた。

「うん〜」と、たゞ黙頭くばかりであつた。

「それでその實は」と山越が朴訥な辯で話したのは、この頃のやうな稼ぎで、飯場から物を引ひてゐたのでは、とても世帯を持つてゐる者にはやり切れない。飯場の品物は何でも彼でも無暗に高いが、それは一人者を相手にして、時々脱走するまで見込んであるからだ。

「俺らゝのやうに、嗅子供のあるものは、さうおいそれと、脱走の出来るわけでもなし、借金りになつたつて何れ返さにやならんのだから、あんな高い物はとてもひき

切れないから、事務所で一つ用度をこさへて、何かを安く賣つてお貰ひしたいと、今夜皆で相談して來たよなわけで」と山越はやつと喋舌り終ると、額の汗を拭くやうな手つきをした。

「高いつて飯場の物はそんなに高いかね」と新吉が訊いた。

「高いつてあんだ元木へ行つて買へば、一錢五厘の草鞋が、三錢もするんですから俺ら此間の休みに、草鞋を買つて背負つて來たよな始末で」と山越が云つた。

「酒なんか旦那、そりや水臭い酒を村よか倍にも賣るんだから全く叶はねえ」と、酒で貧乏してゐる工藤は、頭を掻きながら云つた。

「さうかね。そんなに高いのなら、明日の晩事務所の小西さんに話をしてみる。何しろ僕には何んとも云へないのだから、さうして始めるのなら一應飯場頭にも話をし出来る事なら元價位で賣ることにしよう」

「是非一つさう願ひたいんで、何うもお前さん長屋割は取られる、物は高えちや、

俺らとてもやり切れねえから」

『何卒一つ』と云つて、皆んなペコ／＼頭を下げて歸つて行つた。新吉は自分に何の力もないのに、さう頭を下げて頼まれる事は滑稽でもあり苦痛でもあつた。用度を始めれば、外の事務員には肝腎の算盤が出来ないのであるから、小西は新吉にやれと云ふに極つてゐる。さうすれば、山の坑夫長屋に来て坑夫と一緒に暮すのである。その方が事務所に歸つて、何んだ彼んだと五月蠅い事を聞くよりも、結局暢氣でいゝとも彼れは考へてゐた。

十時半になると、彼れは鈴を鳴らして、坑夫や堀子を歸して、やつと床に這入つてからも山に来て暮す日の事を想像してみたり、又たさうすれば、濡れ草鞋を履いて、危ない坑内を歩かなくとも済むのだと考へてみたりしてゐた。

十六

その翌晩新吉が小西に、坑夫の話を取り次いだとき、

『そりやあ好い事だ。そんなに飯場で暴利のなら、早く始めた方が好い。さうして少しうるさい時だから、品物でも安く賣つたら、ちつとは坑夫の爲めにもなるだろう。なあに山の爲めに好い事なら、鑛主に相談する必要はないさ。僕が責任を負ふから大丈夫だ。さうして用度の方は君一つやつて呉れ給へ。僕も來月から、ちつと馬にでも乗つて、元木や笠間の方へ買出しに行かう。酒も好いのを取るよ』と小西は直ぐに決斷してしまつた。

小西、こんな事務所に一人きりで終日引籠つて、寂しい退屈な生活を送るよりも、時折は馬にでも乗つて、方々飛び廻りたいやうな様子であつた。

新吉が用度掛りを初めたのは、それから二日程経つてからであつた。

『四月一日から始めた方が極りがよくつて好いだらう』と小西が云つたので、彼れはそれまでに色々な準備をしなければならなかつた。通帳を作つたり、事務所に出入

の馬方に米や酒も上げさせなければならなかつた。

用度の建物が出来るまでの間に合せに、六疊二た間の坑夫長屋を打ち抜いて、兎も角豫定の四月一日にその店を始めたのであつた。狭い六疊には、酒、米、味噌、醤油や鹽が並んでゐた。土間には薩摩芋の俵や、牛蒡、人參などの野菜物と、石油、種油の罐も置いてあつた。そして天井からは、草鞋や干瓢もぶら下つてゐるので新吉はその片隅みの、松板をぶつつけた机の前に、小さくなつてゐなければならなかつた。

初めてその机の前に坐つたとき、彼はなんだか小さな荒物屋の主人になつたやうな妙な氣がしたのであつた。前の往還は、山裾が突き出てゐる爲めに狭くなつて、家中は少し薄暗らかつた。彼は往還の向ふにまばらに並んだ、ひよろ／＼した杉の木と雑木の生えた山の中腹をぼんやりと眺めてゐた。左手の前の方には、雨を防ぐ屋根だけある風呂場があつた。雞はその周りを廻つたり、山に登つて餌をあさつてゐた。用度掛の小使にと云つて、堀子の中から連れて來た、六左衛門と云ふ青年は、夕方忙し

くならない中に、と言つて、石油罐の竈で飯を炊いてゐた。

「自分が若しこんな山の中に来て、本當にこんな小さな荒物屋を始めたのであつたら」とその時ふと新吉は考へた。やつぱりかうして長く一つ所にゐれば、その狭い中でも權勢や名譽も得たくなるし、戀もするし、喜こんだり泣いたりして、執着が出て動けなくなるのだ。何處へ行つたつて、人間の生活は同じことだ。さう思ふと、あの廣い都會で、毎日知らない人の顔を餘計に見て暮してゐた彼れには、この狭くるしい固まつた生活が、何んとなく不思議にさへ思はれるのであつた。

人間にはいろ／＼な欲望があるのだ。未知の人の中に自分を擴げて行かうと云ふ氣もあれば、よく知り合つてゐる人々を征服しようとする氣もある。さうして夫れは、その置かれた場所で、色々と變つて行くのだ。——と彼はさうも考へてみた。然し彼れは又た、大高取の嶺かち見へる、山間の一軒家や、又た此の山の奥にゐる炭焼の人々の生活も考へずにはゐられなかつた。夕暮れにその路を登ると、遠くの谷間から、

細々とした煙りが登つた。夫れ等の人々は、その煙のやうに寂しい孤獨な暮しをしてゐるのである。あの騒がしい埃の多い都會で、無數に多く人の中に交つて、そして眞先に駆け抜けようと焦せつてゐたときの事を思ふと、これ等の人々の生活は、まるで生甲斐のないもののようにさへ思はれるのである。然し何處で暮しても、多勢で暮しても獨りで暮しても、結局人間の生活は同じことになつて來るのだ。彼れはその谷間で寂しく暮す人達も今まやつぱり此の静かな午後の日が、山の木立に射してゐるのを眺めてゐるのだらうと思つた。

さうして彼れも、前の往還を斜めに、山の雜木の芽ぐみ始めた梢をすかして、やんわりと照してゐる、春近い日にぼんやりと眺め入つてゐた。

十七

四時頃になると、鈴木と松永が下つて來て、彼れの茫然とした物思ひを破つてしま

つた。

「やおおめでたう。用度の店開きか、もう何か賣れたかす」と鈴木が訊ねた。

「なあにまだ何にも、さつき工藤の噂が味噌を引きに來たけど、口が開けてないから夕方に来て呉れて歸したんだ」

「ぢやあ口開けに、俺が盛切りでも一杯貰はうかな。おい六やん、一ぺえついでくんにや」

と呼んだので、六左衛門は、不慣れな手附で酒をはかつて、一合榊に溢れそうなのを、おづ／＼と持つて來た。

鈴木は夫れを受取ると、榊の隅から甘さうに呑んだ。

「あゝ、盛切りが一番甘え、之れで村さへ出る時分に、丁度酔が廻つて來るだ」と口のはたをこすつた。

「選鑛が引けると忙しくなるだらう。僕等も見張りへ行つてなきやあ、晩にまた何

か貰ひに来るかも知れない。失敬』と云つて、宿直の松永は見張りの方へ登つて行つた。

「どりや俺らも歸らう」と鈴木は下の方へ下つて行つた。

選鑛場が引けて、坑夫の女房達が歸つて來ると、用度の前は市場のような騒ぎになつた。髪の毛を蓬々と亂した女達は、箆や風呂敷を持つて押しかけて來た。

「おい六やん、味噌をくんろよ」

「こつちは米だ。晩飯に炊くだから早くしてくんろつて云ふに」とわい／＼怒鳴り立てた。新吉はそれ等の女の手から通帳を受取つて、引いて行くものを記しては、六左衛門に渡したが、不慣れの男一人ではとても間に合はなかつた。

「俺そこには、石油と米をくんせえ」と云つて來た、鍛冶屋の竹と云ふのに、

「竹やん少し手傳つて行つて呉れ、とても之れぢや遣り切れない」と新吉が云つたので、

「よし手傳ふべえか、さ俺が何んでも出してやるから、唄たちこつちへ出せ」と少し滑稽で間の抜けた性質の竹は、土間に立つて怒鳴つたのであつた。

「竹やん、おらそこには種油二合だ。何んだ、これで二合か、足りやしんねえ。人のもんでけち／＼する男だな」と女達は長屋で馴染の竹をからかつた。

「足んなくつても、二合あればよかんべえ、あんまり慾張るもんでねえぞ、さお前はなんだ、六やん米三升だと」と竹も面白半分に働いてゐた。

「なんだ之れで三升か高えな、

選鑛女となあ、役屋の米はよ、

三斗九升だよなあ、

どんと四斗はないよ、

か、やるやつたな」と唄をうたつて悪口を云つて行く女もあつた。

然しその忙しさもほんの一刻であつた。長屋の者が品物を引き終つて了ふと、もう

訪ねて来るものはなかつた。

『ずいぶん忙しかつたね、竹やんどうも有難う、もう誰もこないから、飯にしようか、なあ』

と云つて、新吉は帳面に記入を終ると、かう云ひながら、痛くなつた膝を拂つてそとに出た。

盆の底のようになつてゐるこの澤合は薄暗く暮れてゐたが、空は未だ明るく光つてゐた。下の方を見ると、一目で見渡せる長屋の前には、どこでも石油罐の竈で、飯を炊いてゐた。仕事から上つた坑夫等は襦袢を着て、狭い往還をぶら／＼と歩いてゐた。夕靄は澤合や木立の蔭に、煙のようになめぐつてゐた。

十八

新吉は初めて山に来るときには、坑夫とはどんなに恐ろしいものか知れないと思つ

て来たことを考へた。さうして今この静かな澤合で、穩かに暮して居る有様を近々と寄つて見ると、不思議に思はれるとゞもに、云ひやうのない親しみをさへ感ずるのであつた。ひよろ／＼とした杉の木根方に捨てられた繩を足の先でかきよせながら、茫然と考へ込んでゐるところに、何處から来たのか、クワは息を切らせながら飛んできて、彼の胸に飛びついた。

『あゝびつくりした、お前もまだ歸らなかつたのか』と新吉はその頭を撫でた。クワの後には松島と工藤とが飼つてゐる犬が二疋ついてゐた。そしてそれ等の犬もまた彼れの襦袢に頭を横にしてこすりつけた。

『よし／＼』と云つて、彼れはしやがんで、三疋の犬を交る／＼撫で、やつた。一つを撫でると、一つがその間に割込んで来た。彼れはそれを面白がつて、いつまでも犬を相手に遊んでゐた。空はだん／＼暮れて行つて彼れが家に這入る頃には、長屋の前にはもう坑夫も歩いてはゐなかつた。

その翌朝新吉は早く起きて、二號飯場の下の方へ行つた。そこには飯場からやゝ隔て、二十坪程切り開いた土地があつた。その外れは、五尺程の崖になつて、石垣で築いた下からは、豊富な清水が、小川のやうに流れてゐた。下の方の澤の方から登つて来た朝日は、澄みきつた水に輝いてゐた。此の三日間程に、彼れの頭を一番悩ましたのは、そこに建てる、用度掛の設計であつた。

その清水の流れる石垣の上を、彼れの部屋にしようと思つた彼は考へた。それは朝日もよく射し込むし、そこに坐つてゐれば、下の方から登つて来る人の姿も、ちよつと見には如何にも原始的な氣持の好い茅小屋も眺められるからであつた。さうしてこの清水の傍に、風呂場と臺所とを向ひ合せて建て、石段を造らせれば、何も彼も清潔にして置く事が出来るのである。無口の六左衛門は決して自分の生活を亂すやうな事はしないだらう。さうすれば自分は酒をやめて、初めて山に来た時、考へたやうな、本當に静かな生活が出来るのだ。彼れはその日の来るのを思ふと嬉しくて耐らなかつ

た。山の大工に引かせた設計圖を眺めて、

「さうだ、紙や煙草を並べて置く棚も造らなければ、あゝ亂雑では堪らない」とそんな事も考へてゐた。

新吉はその日から毎日、その普請場に来て、大工の傍について、色々の指圖をしてゐた。彼れはその家さへ出来て仕舞へば、自分の生活がまるで新しくなるやうに考へてゐたのであつた。

しかしその頃から、又た每晚彼れの家には、飯場にゐる一人者の坑夫や堀子や、長屋にゐる者でも酒好きなきな者は、入れ代り入れ代り遊びに来るやうになつた。それは酒好きなきな彼れが、夕方の用事が済むと、毎日手傳に来る鍛冶屋を相手に、酒を飲み初めるころに、

「今晚は」と云つて来るのである。さうして

「まあ一杯やらないか」と盃をさすと

「へえ、どうも」と之れを受けながら上り込んで来るのであつた。さう云ふ男が二人宛來ては、夜更けまで、一緒になつて酒を飲んでゐるのであつた。

その間には飯場には、小念佛だの浪花節だの法界節の旅藝人が来るのであつた。

小念佛と云ふのは義太夫とも、浪花節ともつかないチヨボにつれて、幕一重を張つた舞臺でやる芝居のやうなものであつた。垢臭い飯場の廣間がいつも舞臺と觀客席になつた。長屋のものはぎし／＼鮮のやうに押しつめて、火鉢の代りに、毛布を膝にかけては見物して、喝采してゐた。そしてその芝居が終ると藝人を相手に酒になるのが極りであつた。

十九

彼れは毎朝宿醉に苦しんでは、裏の山や見張りの方へ散歩に出掛けた。クロはいつもその後について來た。その後には坑夫の犬や、その頃から鈴木の飼ひ始めた、ボチと

云ふ斑犬もついて來るので、それはまるで犬の行列のやうであつた。選鑛場の女達は

「ほら又來たぞ、どうだあの犬はぞろ／＼／＼／＼と」と云つて笑ふのであつた。

新吉はいつでも、

「向ふの家さへ出來てしまへば」とさう思ふのであつた。

「さうすれば俺も酒をやめて、落ち着いて本でも讀むんだ。俺が酒を呑まなくなれば、誰も遊びには來なくなるだらう」と、さうして彼れは、大工に、

「仕事を早くして呉れ」と催促に出かけるのであつた。壁も塗らなければ、杉皮で葺く丈けの家の工事は、どんどん進んで行つた。

始めて十日も経たない中にだんだん家の恰好になつて行つた。新吉は毎日その工事場に来て、その家に住む日の事を考へては、色々な空想に耽つてゐた。

月半の休みの前の晩であつた。休日には酒の爲めに間違ひがあるといけないと云ふので用度で酒を出さない規定になつてゐたのに、長屋からも飯場からも、明日の分ま

で酒を引きに来た。夫れが終つた頃には、酒樽はもう軽くなつてゐた。その晩も彼れのところへは、いつものやうに鍛冶屋と小林と云ふ坑夫が酒を飲みに来てゐたのであつたが、三人とも可なり酔つた時分になつて、樽は空らになつてしまつた。倒れるまで飲まなければ、我慢の出来ないやうな癖のついた新吉には、それが大變物足りなかつた。

「困つちまふな酒がなくなつて、つまらないな、村へでもさがらうか、竹やん」と彼れは鍛冶屋に話しかけた。

「村さ下るのは明日にした方が好いだよ、俺もう可なり酔つた、もう寝た方が好いだよ、なあ井上さん」と鍛冶屋は慰の顔で云つたのであつた。けれどもさう云はれると、その無い物がなほ欲しくなつた。さうして今まで眠つてゐたさま／＼な物足りなさが急に目醒めたやうな氣になつたのであつた。

草鞋と干瓢は彼れの頭のすぐ上の方に、埃り染みて乾枯びてぶら下つてゐた。薄暗

い洋燈の光が、その草鞋や干瓢や、酒がなくなつてがつかりしたやうな、蒼白い二人の労働者の顔をどんよりと照してゐるのであつた。薄暗い隅の方には、酒や醬油や味噌の樽が、ぼんやりと並んでゐた。そして六左衛門は、彼れの机のそばで、もう居眠りを始めてゐた。

新吉はこの乾枯びた干瓢と草鞋の下で、羽目板の隙間からは夜通し冷たい風の吹き込んで來るところで眠るのが、堪らなくつまらない事と思はれた。四月もこんな山中で、修道士のやうな禁欲の生活をしてゐたことが、急に馬鹿らしくなつて來たのであつた。

「なんだつてこんなバサ／＼した生活をしてたんだ」と彼れは考へた。さうして、「さうだやつぱりもつと酒と女のある明るいところへ行きたいんだ」さう思ふと、彼れはもう、矢も楯もたまらなくなつた。

「どうせ明日は大工も休みなんだから、山にゐたつて仕方がないや、村まで下るく

らいなら石塚まで行かうぢやないか、なあ小林、一緒に行かないか」と今度は小林に相談した。

「だつてもう九時ですせ、向ふさ行つたら十二時になつちまふだ。遅かつべえ」小林は眠さうな眼をして答へたのであつた。

「遅くつたつて好いぢやないか、何うせ明日は休みなんだから、一晚中歩いたつて構やしない。今夜は暖かだから、ぶら／＼歩いて行かうよ、君達いやなら俺れ一人で行く」と彼れはもう立ち上つて支度を始めた。

「ぢやあ、俺等もいくべえか、なあ竹やん」と小林は竹を促した。

「うんいくべえ、俺らも家さ行つて、ちよつくら支度して来るから」と竹も小林も支度に歸つて行つた。新吉は洋服を着て、脚絆草鞋をつけてそとへ出た。月のない山の夜は暗かつた。けれども大氣はうるんで暖かであつた。星はかすんでゐたが、やがてクロは飛び出して来て、彼れの胸に飛びついた。

「さ遊びに行くんだ、お前も連れてつてやらうな」と彼れは頭を撫でてから歩き出した。

二十

鍛冶屋の家は、飯場の一番下の長屋であつた。その前まで来たとき、竹は新らしい半纏を着て、そとに出てまつてゐた。女房持の小林は、家に歸ると出られないので、竹の脚絆や草鞋をかりてゐた。

「提灯はいらねえかな」と竹が云つた。

「んで提灯なんか、その中に月が出るべえ」と小林が答へた。

「そのうちに夜が明けるだらう」と新吉は云つた。そうして三人はぼつぼつ歩き出した。

山道は暗かつた。けれども三人とも慣れた道なので、平氣で歩いてゐた。茅小屋を

通り越したとき、小林は急に元氣を出して

一の番よりなわ二の番よりもよ

いやな三の番になわ

どんと嬬取られよ

か、あ、とこすん／＼だ

と鼻にかゝる聲で唄ひ出した。

『この野郎、嬬取られやしねえかと思つて心ぺえしてやがんな』と竹は小林の肩をたゞいた。

『なんで嬬の事なんか心ぺえなんかするもんかよ、あんな嬬、取つて呉れたつて、取つてくれる人もあんめえし、早く石塚さ行つて好い女でも探すべえ』さうして小林はまたうたひはじめた。静かな山に、木立に、澤合に、彼の聲は、暖かな大氣を動かして響いて行つた。クロは時々先に駆け出しては、姿の見へなくなることあつたが

すぐに又歸つて来て、新吉の外套にその身體をこすりつけた。

新吉は今まで毎日見慣れてゐた、山の姿も澤の工合も、夜のために全く變つたところを歩くやうに思はれてゐた。時々左右から、高い山が壓しつけるやうにせまつて来て道は眞暗になつて、それを過ぎると、廣い澤が湖のやうに静かに開けてゐた。濕つぽい暖かな大氣が、彼れの酔つた顔に氣持よく當つた。

村境まで來た時に、

『どつか起きてゐると好いんだがな、おすが婆さんのところでも、仙太のところでも起きてゐたら、もう一杯やつて行かうよ』と新吉が云つた。

『さあ何うでやすか、もうずるぶん遅えからな』と小林が云つた。茶屋はもう何處でも起きてゐなかつた。三人は又たぼつ／＼と歩いてゐた。

事務所の前を通るときに

『遊びに行つたのが知れたら、またあの安部の野郎は何か云つてやるんだろ』と新

吉はふと考へた。けれども

「構ふもんか、する丈けの事はもうしてあるんだ。暇の時間に俺が遊んで何が悪いんだ。いくら鑛主だつて、そんな事まで干渉しないだらう、干渉したつて仕方のない事だ」

クロは事務所の方の道へ這入りこんで行たが、新吉がどしどし先に行くので、又た戻つて來た。

山からは二里以上も歩いて來て田圃の上の崖道に來たとき、漸く月は登つて來た。崖の下には、此の邊には珍らしい水田が、目路の限り遠く擴がつて、その末は霧の中に隠れてゐた。銅のやうな鈍色をした月は、遠くの森蔭から登つて、水田の上を、どんよりと照らし始めた。苗代のまだ植らない廣い水田は、漫々とした海のやうに見えるたのであつた。やがて月はだん／＼に黒ずんだ眞鍮色になつて行つた。そして水田の上も、向ふの木立も、蠟燭の焰で照らされたもののやうに、幽暗な光が漂つてゐた。

『石塚まではまだ餘つほどあるかな』とそのとき新吉が訊いた。

「なあにその佐竹のあとを通ればすぐでやすよ」と石塚で生れた鍛冶屋は、造作なげに答へたのであつた。彼等は又た、その佐竹の城跡と云ふ、暗い谷を一つ越えたそして向ふに見えた木立に圍はれた、石塚と云ふ廢驛にやつとはひつたのであつた。

二十一

石塚にはひると、小林と竹とは何かとどごと相談をしてゐた。

『おい早くどつかへ行かうぢやないか、もう酒もすかつり醒めちやつたせ』と新吉が云ふと、

『いま好いところ案内すべえと思つて』と竹が云つた。

『好いところつて何んなとこよ』

『水戸からこつちで、一番好い娘があるところへ案内すべえと思つてよ』

「いくら好いたつて娘ぢやしようがないぢやないか」

「なわにそでねえんで、こゝらの娘は、針仕事もすれば、畑うねもするし座敷さも出て来るし、何んでもするんだから」と小林が口を入れた。さうして坂の上に建つた百姓家のやうな家につれて行つた。

それはもう二時を過ぎてゐたので、その家ではなか／＼起きなかつた。さうしてやつと起きて來ても、容易に戸を叩いてくれようとはしなかつた。

「竹だよう、山から來ただから明けてくんろよう」と鍛冶屋が幾度か怒鳴つたのでやつと戸を開けて

「なんだ竹やん、こんな遅く來て」と寐呆け顔をした、四十位の女將が云つたが

「おや、お連の方もあるんだね、こちらへおはひりなんしよ」と、漸く戸を一杯に明けたのであつた。新吉も小林も中に入つた。さうしてクロも土間にはひると、うろ／＼とそこら中を嗅ぎ廻してゐた。

肥つたおさんどんのやうな形をした女が、二人起きて來た。眠むさうな眼をして、洋燈と火鉢をぶら下げて、

「こちらはみんな床が敷いて散らけてゐるから、離れの方さおいでなんしよ」と、眞暗な廊下を通つて六疊の離れに通して呉れた。三人はまたそこで酒を飲み初めた。しばらくしてから、お霜と云ふその娘も出て來た。それは水戸からこつち一番の娘だとか云ふ程の女ではなかつた。ハイカラに髪を結つて、女學生のやうな言葉を使ふ小肥りな女であつた。

「もう之れからはいくら飲んでも大丈夫だ、然しずゐぶん疲れたね」と新吉が云つた。

「なんだつてよ、もう二時過ぎてるだから、ずゐぶん長かつたなわ、あゝあ小林の兄弟、おらまつたくがつかりした」と、両手を後について疲れきつたやうな顔をした「竹やんよ、そんな意氣地のねえこと云はねえで、久し振りで、一緒に一つおどり

やすべえ』と一番年の若いお時と云ふ女が、竹の手を取つて引きずり起した。

『ようし、そんなら一つ踊るべえ』と竹も立ち上つた。お時は手をはたきながら、

あ、やるやるやつたな、

あ、やるやるやつたな

と頓狂な大きな聲で、歌をうたひながら、踊りはじめた、竹もそのあとについて、

あそこすんく、か、

こらしよつと、

と足を踏み鳴らして、踊り廻つた。吊洋燈はぐらぐらゆれて、臺の上に並んだ徳利はがたたく鳴つた。

『よく似合ふぞ竹やん、しつかりやれ』と小林は拍手した。さうして自分も泣くやうな鼻聲を張り上げて、感に入つたやうに目をつぶつて撰鑪歌をうたつてゐた。疲れてやけくそになつたやうな、荒んだ騒ぎが、部屋の中に一杯になつてゐた。

やつとそれが静まつたとき、お梅と云ふ年増の女が、

『あ、お銚子がみんな空だ』と云つて、立ち上つて障子を開けたが、

『きやつ』と云つて後ずさりした。

『何うしたんだ、何うしたんだ』と、皆んな立ち上らうとしたが、その時障子を開けたところから、クロがにゆうと首を出した。

『こいつに飯をやつて貰ふのを忘れてゐたんだ。きつと腹が減つたんだよ』と新吉は立ち上つて、廊下から下へおろしてやつた。

『あゝたまげた、おらほんに何かと思つたよ』とお梅は又た妙な聲を出したので、皆なは笑つた。

三十二

クロは飯を食ふ中たけは、地面に下りたが、皆なが座敷に這入つて了ふと、又た上

つて来て、障子のとこへ鼻をつけてうる／＼してゐた。

『あの犬きつと焼てるだ。助平犬つたら、竹やんのやうだ』とお時が云つた。

『何云つてやがるだ、自分こそ助平のくせに、おらちやんとしつてるだ』彼等はそんなことを云つていつまでも騒いでゐた。

曉の光に障子が白んで来る頃には、もう疲れと酔ひでがっかりしてゐた。小林も竹も安坐の股に両手をつゝ込んで、がつくりとうなだれてゐた。新吉も肘枕をして横になつてゐたが、

『歸る前に少し寝ようか』と云ひ出したので、

『あゝ眠い、さうしやすべえ、どうもねむくつてたまんねえ』と二人は女に連れられて出て行つて了つた。

クロは何うしても地面に下りないでその縁側に丸くなつて寝てゐたのであつた。

午頃になつて彼等はやつと起きて、また一しきり酒を飲んで、山に歸つて行つた。

田圃の上には、もう幽暗な光りも漂つてゐなかつた。腐つた稻の古株が、温い水の上に汚い顔を出してゐた。三人は黙つて長い山道を歸つて行つた。

村へ来たとき新吉は、

『僕はちよつと事務所へ寄つて行くから』と云つて、二人を先きに歸して、

『や、今日は』と、何喰はない顔をしてはひつて行つた。そこでは小西と鈴木とが酒を飲んでゐたが、

『君、昨夜遊びに行つたさうだね』

と小西は新吉の顔をみるとすぐに云つた。

『や、もう知れてるんですか、實に早いなあ』
と新吉は頭を搔いた。

『なに今日君に話したいことがあつて、山へ迎へにやつたもんだから知れたんだよ
若い人だから遊びに行つたつて好いけど、餘り大びらにやらないやうにして呉れ給へ』

と云ふそばから

『なあに若い中はしかたねえさ、俺だつて、五里位の夜道して遊びに行つたことがあるだ』と鈴木は取做し顔に云つた。

『それで迎へにやつたつて、何か急用でも、出来たんですか』と新吉は話をそらせやうと思つて訊いて見た。

『いやちつとも君が下つて来ないから、何んな子か聞きたいと思つて、それに鑛主の方から手紙が来てゐることもあるから話をして置かうと思つて』

『山の方ぢやみんな喜こんでゐますよ。草鞋だつて、種油だつて半分値ですからね飯場はつまらないか知れないけど、坑夫はみんな喜こんでゐますよ、で、鑛主の方からの手紙つて云ふのは何です』

『こつちの考へてゐた通りさ、假令好い事にしろ、専断でやつて貰つては困るから用度なんか止めろつて云ふんだ』

『そんな馬鹿な奴が、今止めて如何するんです。あの時分のせつぱつまつた事情は知りもしないで、何云つてやがるんだ』

『いや夫れは僕が責任を持つて始めた事だから、やめなくつたつて、鑛主が来たらちやんと言ひ開きはするよ、だから君も、しばらくだから酒もつゝしんでゐて呉れ給へ、ねえ、今ま鈴木君とも話してゐたところなんだ』

さう云はれると、新吉も

『いやどうも』と云つて黙るより仕方がなかつた。

三人はまた酒を飲みながら、鑛主の我儘な事や、事務員のつまらない愚痴をこぼした。

『少し鑛況が直つて来たたら、水戸へでも氣晴しに行つて来なさいわ、ほんとにやりきれない』

と年上の小西も、酔ふとそんなことを云つてゐた。

その翌日から新吉は又た毎日普請場に出かけては、もうそろ／＼造作に取りかゝる大工の仕事を監督してゐた。棚を一つ吊るにも彼れは幾度か考へた。そしてその居間はよく日の當るやうに、小西に無理に頼んで硝子戸にして貰つた。

晝間のうちは彼れはその普請場で暮してゐたのであつた。柔らかな春の日は、その崖の上をよく照らした。下の方の澤や、兩側の山の雜木は若芽に濕んで、山櫻の花がその間にとろ／＼、ほの白く咲いてゐた。

彼れはその暖やかな日を浴びながら、毎日同じやうな空想に耽つてゐた。

『この新しい家に来て、きちんとして静かに本でも読んで暮せるなら、自分はいつまでこゝにゐたつていゝのだ』とそんなことも考へた。さうして出来るなら、あの自分が一番好きな廣い澤に、家でも建て、住むやうになりたいとも思つた。それは村と

現場の中程にあるなだらかに潤けた澤であつた。北の方には低い明るい松山を背負つて、前は遠く原のやうに、擴がつてゐた。その向ふに連つてゐる峯も、丁度その邊は低くなつてゐるので、山蔭に暗くなるやうな事はなかつた。そして芝生のやうな短い草は、どんな風の烈しい日にも、埃一つ立てないほど緻密に奇麗に生えてゐた。山裾からは、美しい清水も湧いてゐた。あの砂埃のひどい都で、骨の髄までざら／＼になるやうな思ひに苦しんで來た彼れには、無理にも東京へ歸らうと言ふやうな氣は起らなかつた。

たゞ女のことを考へると、この邊の溢紙のやうな肌と、しゆるの毛のやうな髪をした女の姿は、彼れの心を暗くした。

『然しそれはまた、その時になればどうにかなるだらう』さう思つて彼れは又た、その楽しい空想を續けるのであつた。

その建物もあらかた出來上つて疊も入れて、もう二三日すれば移る事も出来るやう

になつたときであつた。

新吉はいつものように、その居間になる部屋の縁に腰をかけて、日向ぼつこをしながら澤の方をぼんやりと眺めてゐた。クロはその足下で、遊び疲れたやうに丸くなつてねてゐた。もう小さな細工にうつつた、大工の鉋をかける音や、金鋸の響が、彼れのうつとりとした耳元に、快よく響いてゐた。

その時下の方から、いつもは馬に乗つてくる小西が脚絆草鞋で、ぼつ／＼歩いて來た。そしてその後には、見慣れない男が二人ついてゐた。新吉は不思議な思ひに襲はれながら、その近づいて來るのを待つてゐた。やがて小西はその崖に登つて來ると、

『やあよい天氣だね、どうだね』と言つて笑つたが、その顔は何故か訝えなかつた
『やつと出來ました、來月からはこつちに移れる』と新吉は嬉しさうに言つたのであつた。すると小西は、

『この二人の方が今日東京から來られたんだ、こちらが太田君でこちらが村山君

だ』

『これが用度の井上君です』と紹介した。太田と云ふのは六十位の老人であつた。白髪頭で細面の目の大きい、一こくらしい顔をした男で、一寸見ると上州邊の蒔買のやうな恰好をしてゐた。村山は青い腺病質らしい顔をした、呉服屋の番頭のやうな男であつた。

『まあどうぞおかけなさい』と新吉は二人に挨拶をしたが、小西は、

『村山君、君は安部君を知つてるでしょ、こゝを登つて行くと、選鑛係と書いた所にゐますから行つて御覽なさい』と云つたので、二人は、

『ちやまあ、一寸見物して來ませう』と云つて出て行つた。

『君、今日またこんな事を云つて來たんだ』と云つて、小西は鑛主の手紙を見せた
それには、

本日太田、村山の兩名を用度係として差向け候に付き、井上は舊の如く、坑内監督

に復歸致すよう、御申聞け被下度——

五四〇

と簡単に書いてあつた。新吉はその手紙をみると、言ひやうのない失望が胸にこみ上げて來た。——その瞬間にはどんなに哀訴しても嘆願しても、此の用度に置いて貰ひたい——と云ふやうな氣になつたが、すぐに、今までの愛着に對する反動の、激しい反感が湧いて來た。そしていきなり

「馬鹿にしてやがら、人を何だと思つてゐやがるんだ」と怒鳴つて、その手紙を地面に叩きつけた。

二十四

「今までにこんな代りの來る形跡があつたんですか」と小西に喰つて掛るやうに云つた。

「そんな事はないよ、突然なんだ、今度鑛主が來れば、僕もきつとやられるんだ、

まあ君、そんなに怒つたつて仕方がないよ」と小西は慰めながらその手紙を拾つた。

「だつて今までさんざ苦勞して、坑夫長屋の寒いところで寝て、やつと自分で設計して建てた家が出来るとき分になつて、ひよこんと人にとられちやうなつて、餘り馬鹿にしてやがら、畜生ツ」と彼れは一人で頭の毛を掻きむしつた。

「そんなに君怒つたつて仕方がないよ、兎に角まあ明日、引き繼ぎをしてやつて呉れ給へ、ね、またその中に面白い事があるよ」と小西はしきりになだめた。

「引き繼ぎはしますさ、あの人達は何んにも知らない事なんだから」と笑つたが、新吉は、今まで一と月程の間、毎日々々楽しんで築き上げて來た空想を、跡形もなく粉碎してしまつた鑛主に對する憎しみで其心は一杯になつて了つた。

無斷で用度を始めたのがいけないと云ふのならば、無斷で始めなければならぬ程切端つまつてゐたその當時の状態を、親しく調べてみてから、何うにでもするが好いのだ。用度を始めた必要だけは認めて、夫れを殘置して置きながら、今まで苦心して

来たものは、勝手に抛り出して了ふと言ふのは、自分の使つてゐるものゝ意志や感情をちつとも認めない證據である。と彼れは思つた。人間が自分の意志も感情も認められないで、道具扱ひされてゐるのは、生きてゐる甲斐がない侮辱である。一體自分は何うすれば好いのか、――

失望と憤恨に、蒼ざめた顔をして、彼れはちつと黙つてゐた。

『ちや君、そんな譯だから、餘り激昂しないやうにね。僕はちよつと見張りへ行つて来るから』と言ひ残して小西は上つて行つて了つた。

『勝手にしやがれ』と新吉は、心の中で呟いた。そして仕事をしてゐた大工達に、『おい僕はもう此の用度にはこないのだからあとをやる人に棚や何かを指圖して貰つて呉れ』と言ひ捨て、普請場から外に出た。足下に散らばつてゐる鉋屑が日に曝らされて、それから放つ新しい木の香が、彼れの心を悲しくした。

その晩も彼れの所には、鍛冶屋も小林も、その外に坑夫が三四人集まつて酒を飲ん

でゐた。

『用度で酒を飲むのも今夜つきりだ、うんと飲んで呉れ』と言つて、彼れは六左衛門に幾度も酒を量らせた。

『けふな井上さん』と鍛冶屋が言つた。

『さつき俺がこゝで腰かけてゐたとき、あの蒼い顔をした若い男がきてよ、井上君は折角用度を初めたけど、餘り酒を飲んだり、遊びに行つたりしたのは東京さ知れたもんで、やめさせられた、俺らその手紙を見てきたつて言つただ』

『ふうん、その手紙を見てきたつて言つたかい』と新吉は念を押した。

『うん、見てきたつて確に言つただ、あいつ生意氣な奴だからな、俺らもう手傳になんかこねえだ』

新吉は、初めてこれで段々様子が判つたやうな氣がした。明日村山がきたときに夫れを聞けば、誰れがそんな事を言つてやつたのか直ぐ判ることだ。その上で何うに

も出来ることだが、然しそれにしても、假令酒を飲まふが、遊びに行かうが、自分の時間に自分の金でしたことである。そんなことまで一々鑛主に干渉されてたまるものか、と彼は考へた。

まあ好いや、夫れよか今夜はうんと飲まうぢやないか」と彼れは無暗に酒をあふいだ。そして、

『どうだ竹やん、こなひだわたいに踊らないか』と言つた。

『こんなせめえとこでは踊れやしねえだ。なあ小林の兄弟、こなひだあんなに遊びに行つたりしたもんだから、矢張り悪かつたんだな』と竹は悄氣てゐた。

『まあ好いから、景氣よく飲まうや』と新吉も言つたのであつたが、彼れも矢張りいつものやうに喋舌らなかつた。坑夫達と黙つて飲んで居た。が、やがて一人減り二人減りして竹ばかりが残つてゐた。

二十五

新吉はいくら酒を飲んでも、水のやうに酔はないやうな氣がしてゐた。

『なあ竹やん、こんだ暇なときに、よく切れる七首を一本打つてくれな』と言つた

『うん打つべえ、よく切れる奴をな、俺ら一生懸命になつて打つて見べえ』竹はもう酔ひ切つてねむさうな聲で言つた。新吉は自分の意志や、感情を蹂躪した奴や、卑怯な蔭口や中傷をした奴が、今日の前に出てくれば、本當にその七首で突き通してやりたいと思つてゐた。血みどろになつた残忍な姿を頭に描いては、荒ん氣持を樂しませてゐた。水のやうだと思つて飲んでゐた酒も、いつかその酔が一ぺんに出てきて彼れは蒼くなつて倒れて了つた。

その翌朝新吉は、宿醉でまだづき／＼痛む頭を鉢巻で締めて、引繼の帳簿と品物と照合したり、通帳を調べたりしてゐた。随分だらしなく酒ばかり飲んでゐたのである

から、品物も餘程不足する事だらうと、心配してゐたのが、夫れ程にもなく濟んだので、彼れはほつとしてゐた。午頃になつて村山に小西がついてあがつて來た。

『どうしたんだね。鉢巻なんかして』と小西は新吉の顔をみるといきなり訊ねた。

『なゝに、癪にさはるから、昨夜うんと飲んだものだから』と新吉は苦笑して、帳簿と品物とを合せて、村山に引き繼いだ。小西も懸念らしくそこに立會つてゐたが、格別たいして不足もなく終つたのを見ると、安心したやうに見張りへ上つて行つた。

『時々坑夫が暴れてくることなんかあるでしょうね』とまだ山慣れない村山は、煙草を吸ひ始めるとすぐに訊いた。

『そんなことはありませんよ、休みの日に酒さへ賣らなきや大丈夫ですよ、夫れに坑夫の方が人が好いから』と新吉は答へたが、

『君は東京で僕のことを書いた手紙を見たさうですね、誰から行つたんです』とわざと軽く訊ねてみた。

『え、手紙つ』と村山は驚いて困つた顔をしたが、

『いや僕は』と言ひかけたのを、

『隠して呉れない方が好いんですよ。僕はもう昨夕鍛冶屋から聞ひてしまつたんだから、その手紙の行つた爲めに君方が來られるやうになつたんだから、一體誰から行つたんですか』と新吉は村山の顔をぢつとみつめながら笑つた。村山は少し、極りの悪さうな顔をしたが、

『いや僕は、罫紙で書いたのを、一寸見せて貰つただけですから、書いた人の名は見ないんです』と言ひ抜けるやうに言つた。

『あゝ罫紙ですか、夫れなら大抵判りますよ、事務所の報告は罫紙に書くけど、夫れは數字だけなんだから、罫紙で鑛主に手紙を出す人なら大抵わかります』

『いやそれは、それは、僕が言つたといふと困るんですが、僕は』小吉は、如何んとも當惑したやうな顔をした。

「困るつたつて君が、勝手に鍛冶屋をつかまへてしやべつたんぢやないですか。手紙が来たからやめられたんだの、こんだ僕がちゃんとするだの、餘計な事は言はなくて好いんだ」新吉は折角自分が設計して、やつと建てた處で、まだ一度も住まない家に這入られる男が急に憎らしくなつて来た。ぐづ／＼言つたら擲らうかと考へたが餘り未練臭い卑怯な事のようにも思はれるので、おつと堪へてゐた、そして、

「君も之れから同僚の蔭口だの、餘計な通信だの餘りしない方が好いんですよ」と言つた。村山は赤い顔して黙つてゐた。

「おい六やん、この荷物は馬方が来た時持たしてやつてくれ」と着換の這入つた風呂敷包を頼んで、

「クロ、クロ」と犬を呼んだ。

「さ、貴様は今日からまた村通ひだ」と言つて、クロを連れて見張りへ登つて行つた。犬はまた三匹になつて、ぞろ／＼と彼れの前を歩いて行つた。暖かい晩春の日は

頭の上で輝いて、撰鑛場の片側は山も若々しい新緑が光つてゐた。久しく用度で樂をしてゐた彼れの身體には、何か新しいエネルギーが満ちて来たやうに思はれた。

「あんなとこに燻つて算盤ばかりひねくつてゐるよりも、此の方が好いかも知れない」と彼れは強いて思つてみた。

「しかし罫紙に書いたとすれば安部に違ひないのだ、畜生つ、何うしてやらうか知ら」とその復讐の方法を色々考へてみた。

二十六

「やあ」と言つて彼れは笑ひながら見張りへ這入つて行つた。

「また歸つて来たかす、やつぱり君は採鑛の方が好いだよ」と小西と何か話してゐた鈴木はにこ／＼しながら言つた。

「まあこつちで君骨を折つて呉れ給へ、その中に鑛主にもよく話をするから」と小

西も言つた。

新吉は黙つて、

『うふふ、』と薄笑ひをただけであつた。

その日から新吉は又た、村から通ふやうになつた。事務所に歸つて安部と顔を合せても、新吉は黙つて安部の顔を睨みつけた。安部はいつでもその視線を避けるように何處かへ出て行つて了つた。

採鑛係では一週間に一度づゝ延取りと言ふのをしなければならなかつた。それはその一週間の中に、坑夫が何の位仕事をしたかを調べて、稼ぎ高に餘り不公平のないやうにする爲めであつた。その日には、採鑛係のもの計りでは、坑夫と結托する恐れのある處から、撰鑛係のものも立ち會ふことになつてゐた。

新吉が採鑛係に歸つてから、一週間目の延取りの時であつた。撰鑛係からは安部と後藤と云ふ男が來た。けれども、平素から眞暗な坑内を歩きつけない彼等は、いつも

遅れ勝ちに、おづ／＼とついて歩いてゐた。三號洞敷と云ふのは、その山で、一番深く掘り下げた處から、上下に別れて掘進した坑道であつた。その底まで下るには、普通の坑道から、百尺位は下らなければならなかつた。洞敷の中はいつも五月雨のやうに、水が滴つて、外の坑道よりも、深く陰氣であつた。

その坑道の延取を終つたとき、鈴木や飯場頭は、さつさと梯子を登つて行つた。眞黒な煙突の内部のような堅坑の上の方で、カンテラの明りはちら／＼と心細く光つて遠ざかつて行つた。

安部は梯子の下に來て、まだそこに立つてゐる新吉の顔を見ると、

『君登らないのか』と訊いた。

『登るさ』と云つて、新吉は此の誰もゐない所で、此の卑怯な奴を一つ苦しめやうと考へて、安部の顔をちつと睨んだ。彼れの右の手には、坑道の岩壁や支柱を検査して歩く、ハンマーを持つてゐた。安部は近寄りもしないで黙つておづ／＼と立つてゐ

た。けれども水は劇しく滴つて、新吉の襟首にもどん／＼流れ込んだ。そして上の方からは、

「おゝい、どうしたんだ、早く来いよう」と鈴木の呼ぶ聲が聞えたので、新吉は梯子につかまると、さつさと登り初めた。所々棧のとれた、朽ちかゝつたような梯子に捉つて百尺近い所を登るのは、誰れにも氣持の好いことではなかつた。夫れが若し明るい處であつたなら、決して一步だつて進めはしないのだが、眞黒な暗が、上も下も封じ込めて、カンテラの火は、いつもその手許だけで光つてゐた。時々濡れた梯子の棧が手の中で迂る事もあつた。新吉は無茶苦茶に早く登つて行つた。が慣れた彼れには、夫れは大した苦痛ではなかつた。

新吉が本坑道に出たときには、みんなもう階段堀の上に登つてゐた。夫れは本坑道の上に又た一つ坑道の出来てゐる爲めに、人影も、カンテラの光も見えなかつた。卷上げについてゐる堀子も、延取りで仕事のない間を何處かへ油を賣りに行つたとみへ

てそこには誰れもゐなかつた。鐵のハンドル許りが、冷たく白く光つてゐた。

二十七

新吉はそのハンドルに捉まつて、ふと下を覗いてみた。肥つちよの安部は、まだすつと下の方から、よち／＼と登つて來るところであつた。「あんな卑劣な奴は、こゝから大きな石を落して、殺して了つたつて、何も世の中の損害にはならないんだ。さうして安部が梯子の棧をつかみそこなつて、落ちたかどうだか判りはしない」とふと考へた。然しそれも矢張り卑劣なつまらない事だ。馬鹿／＼しい空想だと思ひ直した。

然し彼は、何かせずにはゐられなかつた。足下にある小さな岩片を拾つて、安部の登つて來る梯子の方へ轉がした。石は梯子にぶつかつて、かたつ／＼と音を立て、落ちて行つた。「あんな音では、わきへはねて、きつと打つからないだらう」と彼が思つたとき、

「あいたつ」と云ふ聲が下から起つて来た。新吉はハツとした。そしてハンドルにかまつて、また中を覗いた。カンテラの光は烈しく揺れてゐたが、又たすぐに直つて、だんだん近づいて来た。新吉はホツと安心したやうな、好い氣持だと思ふやうな妙な氣持を感じながら、猶そこで待つてゐた。

やがて安部は蒼い顔をして息をはづませながら、ハンドルのわきから上つて来た。その顔を見ると新吉は、

「おい君、いたかつたか」と冷かすやうな顔をして笑つた。

「君か、君があゝの石をわざと落したのか」と安部の聲はカンテラの蔭で慄へてゐた。「わざと落したのさ、痛かつたら、君は何の恨みで言つてやつたか知らないが、東京へ下らないことを通信してやつたら、何にも知らずに登つて来る者に、上から石を落した奴が悪いか、喋言らなくつても好いことを喋言つて、友達の事を中傷する奴が悪いのか考へてみる」と彼れはハンドルにかまつて立つてゐる、安部の方へ身を寄

せて行つた。

「僕が中傷つて何をさ、そんなつまらないことを」

「そんなことを云つたつて駄目だよ、君は未だ僕が知らないと思つてゐるのか、村山が山へ来た日に何も彼もみんなちやんと喋言つちやつたんだ。僕が酒を飲まふが女買ひに出掛けようが、大きな御世話だ、それを君は野紙に何枚も書いてやつた事までちやんと知つてゐるんだ。何だつて餘計な事を言つたんだ」

相手の出方一つでは、此の深い豎坑の中へ突落しもしかねない程、彼れは昂奮したその時安部は、

「君つ」と言つて急に眼に涙を一杯浮べた。

「君つ、君と僕だけが金澤の方から直接に来てゐる人間ぢやないか、だからだから」と言つて、汚れた服の袖で目を拭つて、涙に濡れた顔でちつと彼れの方をみた。新吉はこの丸く太つた男が、突然に泣き出したのに驚いた。

「何だつてこの男は泣くのだらう」と考へたけれども、

「だからつて、だからどうしたつて云ふんだ」となほ追窮した。

「だから僕は君の身を思つて、たいちよつと書いただけなんだ」と困つたやうな顔をして、新吉の方へ手を延した。そして、

「罫紙に何枚もなんて噂だよ」と附け加へた。

「馬鹿な、馬鹿にしてら」と言つて、新吉は大きな聲で笑ひ出した。彼れは安部の茶番じみたやり方を見ると、自分の怒つたのも忘れるほど可笑しくなつたのであつた。「身を思つて中傷してくれたのか、よく出来てら」と言つたが、彼れはもう馬鹿らしくつて、安部と口を利く氣にもならなかつた。それきり黙つて階段を上つて行つた。そこでは鈴木が、

「何してたのよ、今呼びに行かうかと思つてゐたよ」と言つて卷尺の端を彼れに渡した。安部も黙つて後の方に立つてゐた。

二十八

そのことがあつてから、安部は新吉とはまるで口をきかなくなつた。新吉は毎朝早く起きては、クロを連れて先に出た。緑を基調にしたさまざまな色の新緑は、山に萌えて、眞つ赤な山躑躅は、山の上にも谷間にも咲いてゐた。新吉はその花が好きであつた。それはその花の色や形ではなく、彼れの少年時代の悲しい追憶が、その花の上にあつたからであつた。それは彼れが九歳のとき、恰度その頃悲運に傾いた彼れの家を助ける爲めに、昔彼れの家で書生をしてゐた男が、

「中學を出るまで御預かりしませう」と言つて、雪の深い山形へ連れて行つた。人一倍氣の弱い、母親つ子であつた彼れは、上野から汽車に乗つて、暗い空に赤い煙の飛ぶのを初めて見たときからもう、母親のそばに歸りたかつた。雪の深い一冬を山形の町で過して、彼れは病氣となつた。そして幼い字で、早く迎へにきてくれと母親に

手紙を出したのもその時であつた。然し迎へには父親がきた。平素は口をきくのも恐ろしかつた父親もその時許りは懐しかつた。

寒い山形では雪が解けて、桃の花の散つた五月頃であつた。彼れは父親の膝にのせられて山形から仙臺まで、俣にゆられて歸つて行つた。三島の通洞と言ふ長い、木で圍つたトンネルがあつた。行くときにはそのトンネルには、太い長い劔のやうな氷柱が、脅かすやうに垂れてゐた。幼い彼れにはそれは恐ろしいものであつた。俣がまだトンネルの手前の峻しい峠を通つてゐるときであつた。一番遅れてゐた彼れの俣は吹雪の爲めに、前に行く俣とは遠く隔てられて了つてゐた。森の傍を通るときも、峠の上から高い瀧の落ちて来る所を通るときも、彼れは幌の間から幾度か覗いてみた。けれどもいつも眞白な雪が、濛々とあたりを閉ぢこめてゐるばかりであつた。さうして俣は、崖の端とすれどに、一步を誤れば深い谷に落ちさうな所を通つてゐた。彼れはもう寂しさで恐ろしさと、そしてさつきから凍えついた手足の冷たさに、大きな聲

で泣き出して、車夫を困らせたのであつた。

しかし、トンネルの中にはもう氷柱もなかつた。そして父親に抱かれてゐる手足はぬくぬくと暖かであつた。その谷間の深い峠の上に来た時には、谷間には未だ雪が深かくと残つてはゐたが、燃えるやうな赤いのと雪のやうに白い躑躅が、谷間にも山腹にも、何處にもかしこにも咲いてゐた。彼れは行く時の寂しかつた事を思つた。そしてまたすぐに母親の顔が見たくなつて、しくしくと泣き出した。

『何をなく、なにを』と、父親は優しく頭を撫で、呉れた。

山躑躅の花をみると、新吉はいつもそれを思つた。

『しかしもう、いくら手紙を出したつて迎へに来て呉れる人なんかいないだ』さう思ふと彼れは、子供のやうな寂しさに襲はれて、涙が頬を傳はるのであつた。

『今時分、バカ／＼しい事だ』と思ひながら彼れの好きな廣い澤に来ると、寝轉んで、またいろ／＼な空想に耽けるのであつた。澤には若草が、一面に青くはえてゐた

クロも彼れの頭の傍に丸くなつて休んでゐるのであつた。

朝新吉が山に登るころには、新らしい用度の建物には、朝日が氣持よく射してゐた崖の下から流れる清水は、いつも同じやうに澄んでゐた。そして下の方を見晴らした硝子張りの部屋の中では、太田や村山が、朝飯を喰べてゐるのさへ見へるのであつた。夕方山を下る頃には、風呂場の煙突から立つ煙りが澤の方に流れてゐた。新吉はそれをみる度に云ひようのない不愉快な氣持と、自分の無力を嘆く氣になるのであつた。

『鑛主は自分の意志も感情も、黙つて蹂躪して平氣である。それなのに自分は、何うする事も出来ないのだ。自分と同じやうな安部には、復讐をする事が出来ても、鑛主には餘儀ない、屈從をしなければならぬ。こんな不愉快な思ひを忍んでまでも、世の中は生きて行かなければならないのか』そんな思ひが、いつも彼れを苦しめた。さうして彼れは遂には、彼れが凡ゆるものに對して持つてゐる、愛着をさへ呪ふやうになつてゐた。

二十九

『人間にはもつと本當に眞剣に、考へなければならぬことが、澤山あるのだ。それなのに俺は毎日、この不愉快な壓迫と、下らない暗闘に氣を腐らせてゐるのだ。世の中がいやになるのも、つまらなくなるのも、みんなこの變なものゝすることだ。之れさへなけりや、之れがあるから、本當に生きて好いんだか死んで好いんだかさへ判らないんだ』

さう思ふと新吉は、村へ歸るのも嫌になつた。みんなの嫌がる宿直を引き受けて、山で暮すことが多くなつた。仲間の事務員が歸つて行くと、彼れはクロを連れて大高取の峯に登つて行つた。夕陽はいつもその峯にうつすらと射してゐた。青葉に包まれた小山の峯は目の下に遠く、波のやうに連らなつて、鹽子の村の竹籜や川や、百姓家は、薄明るい光の底に靜かに沈んでゐた。

夜になると、硝子戸から明りを吸ひとられて、抜けがらになつたやうなランプの下で、ぼつねんを考へこんでゐた。クロはいつもその足もとで、丸くなつて眠つてゐた。六月になつて、その山の鑛況はめつきり直つてきた。坑夫の稼ぎもよくなつて、人数も殖へて行つたので山はめつきりと景氣がついて來た。坑内から起る勇ましい爆發の響きは絶え間なく轟いて、建て増した選鑛場から湧き上る槌の響と選鑛歌は、初夏らしくなつてきた山の中に流れてゐた。

事務所には、こんど愈々所長が、來るといふことが、鑛主から通知があつた。小西は少し不平な顔をしてゐたが、

『まあ好いさ、ちやんと所長が、極まつて呉れれば、こつちの責任は軽くなる譯だから』と言つてゐた。

『何がきたつて好い。尠くも人のしてゐることを明らかになつてもに見て、ちやんとやつて呉れさへすりや好いんだ』と新吉は考へてゐた。

さうしてある晴れた日に、その所長は山にきた。それは鑛主の細君の兄だと言ふことは山にきてから判つたのであつた。四十近い、細の面高な顔をして、立派な髯を蓄へた男であつた。その男は天津と言つた。そしてその所長のきたのと同時に、採鑛係の事務員を三人連れてきた。

その中で小谷と言ふ男だけは、砲兵工廠か何かへ勤めながら、私立學校の採鑛冶金科へ通つて苦學したと言ふ、曲りなりにも最初から鑛山に興味を持つた男であつたが新吉より二つ三つ年長の、小心な頭の悪い男であつた。

あとの有本と、沼田と言ふ二人は、それとは全く別で、有本は九州生れで、三十になるいまゝでに御用商人もやれば、撫順炭鑛にもゐたことがあると言つて、身體は小さいが、いつも大きい法螺ばかり吹いてゐる男であつた。

沼田も、水戸の劍客の子に生れて、縣廳の技手か何かを振出しに測量をしたり、密獵をしたりして北海道から千島の方まで、冒險的な生活をしてきた男であつた。此の

二人は、此の山の仕事なんか大した執着もなく、言はば失敗した苦しきまぎれに、一寸腰掛けにやつてきたんだ、と言ふ風がわりわりとみへてゐた。

大津は初めて山にきた日には、その三人を連れてきて、自分の挨拶と共に一同を紹介しただけで歸つて行つた。

『所長がちゃんと極つて、下らない事まで東京へ問合せないでやる事が出来るやうになると、便利は便利だね』と新吉は鈴木に言つた。

『何がきたつて同じことよ、山へきてすぐ坑内も見ねえやうな奴、來たつてしよがねえ事だ』と鈴木は不平らしく言つてゐた。

その夕方新吉が事務所に歸つて行つたときには、大津は小西と一しよに、奥座敷で酒を飲んでゐた。

三十

『ただ今、今日は失禮しました』と新吉が挨拶すると、大津は、

『や、ご苦勞さま、君が井上君だつたね、君の事では、おぬい（鑛主の妻）もいろいろ心配してゐる。ときどき君のおつかさんもくるのでね』と言つた。新吉は、

『や、いろいろ御心配をかけて』と仕方なしに言つたが、

『ま、一杯やり給へ』と大津は盃をさしてから、

『處がその鑛主からもよく言はれてきたんだが、君は大分坑夫と一しよに酒を飲んだりするさうだ。さう言ふ事はよくないから、氣をつけて貰はねば困るね』もう大分酔の廻つてゐるらしい大津は、突然言ひ出した。

『坑夫と酒を飲んだつて、僕は仕事が濟んでから一しよに飲んだだけで、その事についていろ／＼東京へ報告してやつた人があるやうですけど、何も坑夫と一しよに酒を飲んだからつて、仕事に差支へを及ぼさなければ好いちやありませんか』と新吉は、それでも多少遠慮しながら、やり返したのであつた。

『いや夫れがいけないんだ。第一事務員と坑夫と一しよに酒飲むと言ふ事がいけないんだ』

『いけないいつたつて、坑口祝ひだの取立だのつて、時々は一緒に飲むぢやありませんか、いけなと言ふのは、酒を飲んだ坑夫なんかは、依估の事をするからいけないと言ふなら、僕の今日までの仕事をみて呉れ、ばわかるのです。仕事の方もみないで、そんなこと言つたつて私には判りません』

『いや何よりも事務員と坑夫と酒を飲むなんて言ふことはいけないんだ。それに事務員と坑夫と餘り仲善くして貰つては困るのだ』

『そんな馬鹿なことが』と新吉はもう堪らなくなつた。

『事務員だつて坑夫だつて同じ人間で同じやうに使はれてゐるんぢやないですか。仕事がしまつたときや休みの日に酒を飲んだつて、何が差支へあるもんですか、それがいけないと言ふなら、あなたと僕と酒を飲んでもいけないと言ふことになるでせう』

僕はあなたがこられたら、鑛主のそこへくだらないことを、報告される必要もない程、事物をちやんと見てもらへると思つてゐたのですが、どうも初めから色眼鏡をかけて物を見て貰つては誠に迷惑します』

『君は何うも感情に走つて困るね』と大津は呂列の廻らないやうな口調で『人間と言ふものは感情の動物だから』と言ひ足した。

『感情の動物だから何うしたんです』

『だから感情を大切にしなければならぬ、ね、君、人間と言ふものは』と又感情の動物と言ひさうにした。新吉は今までむきになつたのが馬鹿らしくなつた。初め年齢や風采を見た時は、それ程馬鹿だとは思はなかつたが、成程妹の亭主に使はれる人間は、やつぱり少しどうかして居ると考へた。そして、

『やどうも、大變お邪魔しました。僕はあつちで飯を喰ひますから』と言つて座を立つた。小西は黙つてにや／＼笑つてゐた。

大津はその山へきてからも、現場には餘りやつてこなかつた。さうして夕方新吉が事務所に歸るころには、いつも晩酌をやつてゐた。新吉 毎日の報告をその膳のところに持つて行くと、大津はとろんとした眼で繰り返し繰り返し眺めてから『何故此の坑道は、右へ切り込んだのだ』とか、杭木の使ひ方が多過ぎるとか、譯のわからない質問や苦情を言ふのであつた。

間もなく誰も彼れも、大津の常識のない仕打に呆れ返つて仕舞つた。そして唯だ、鑛主の細君の兄と言ふだけで誰れもが仕方なしに、彼れに表面的の敬意を餘儀なく拂つてゐた。

新吉は、大津と一しよにきた人々の中では沼田と一番親しくなつて行つた。沼田は彼れよりも十程も年上で、淺黒い顔の頬には、濃い髯が一面に生えてゐるので、誰れ言ふともなく、

『おやぢ』と言ふ綽名をつけてしまつた。今までに北海道では土方相手に工事の監

督をしたり、千島に行つては臘虎の密獵船に乗つて、廣い世界で放縱な生活をしてきた彼れは、

『こんな狭苦しい山の中の生活は、窮屈でたまらない。早くもう一度千島へ行きたい』と言つてゐた。

彼れはそんな生命がけの仕事ばかりしてきたほどあつて、腕力も強ければ、劍術にも秀でた男であつた。

三十一

或る晩新吉と一しよに宿直をした時であつた。薄暗いランプの下の、砂だらけの卓子で向ひ合つて飯を食つて仕舞つたとき、

『なあ、井上、考へてみると人間なんてつまらねえものだな』としみじみと言ひ出した。

新吉は平素の沼田にも似合はない事と思つて、

『どうして、何んだつてそんなことを言ひ出したんだい』と訊き直した。

『今日な、袋田の小學校の生徒を先生が連れて山を參觀に來たろ』

『あゝそれで』

『俺はあの袋田へ十年ばかり前に測量技手で行つてゐたことがあつたんだ。その時足袋屋の座敷を借りて下宿してゐただけど、そこに若い娘がゐてなあ、俺はつひ夫と關係しちまつたんだ。さうして俺が北海道へ行かなければならなくなつた時分には其の娘はもう腹が大きくなつてゐた。けれど俺は命令で北海道へ行かなければならぬ、向ふへ行つてからはこちらの身體がぐら／＼して了つたものだから、つひ夫れつきり便りも絶えてしまつたんだ。夫れから後餘つほど經つて聞いた事なだけど娘は腹が大きくなつて家にゐられなくなつて、別に家をもつて子供を生んでから、ずつと一人で暮してゐるさうだ。その子もちゃんと育つてゐると言ふ事だから、もう學校

へ行つてゐる時分だし、年頃も今日來た生徒たち位ゐるんだから、この中俺の子もあるかも知れねえと思つて、よく／＼見たんだけど、何れがさうだか解りやしねえ。餘程教師に姓を言つて訊ねて見ようかと思つたけど、さうして判つたところで仕方のない事だから、俺ら諦めちやつたけど、何れが自分の子だか判らねえなんて、人間なんてつまらねえもんだ』と言つて、

『あはゝゝ、つまらねえ事だよ』と沼田は笑つたが、その眼には涙が一杯たまつてゐた。

『さうだらうなあ、僕なんかにはそんな經驗はないから判らないけど、情けない氣がするだらう』と新吉は云つた。

『それつ切り俺はくしや／＼しちまつて、今日は一日考へてゐた』と沼田が言つた二人はしばらく黙つてゐた。

『本當に人間なんてつまらないものだ。僕もこの頃つく／＼さう思ふんだ』と、今

度は新吉が言つた。

『今度来たあの天津なんて言ふ奴だつて、ただ鑛主の細君の兄貴といふだけで、毎晩事務所を酒を飲んで、下らないことを言つて威張つてゐられるんだ。向ふはそれで好いかも知れないけど、こつちはそのお蔭で、感情を蹂躪されたり、支配されたりしてゐるんだ。外の事なんか癪にさわつて考へるひまはありやしない。やつぱりあんな下らない奴に支配されてゐるんだ。僕は考へると世の中が嫌になつて来る』

『ばか——』と沼田は大きな聲で云つてから『けちな事言ふなよ』と言つた。

『いやしかし本當だよ、こなひだの晩だつて、僕が退屈だから老子の講義を讀んでゐると、奴酔つぱらつてやつて来て、やあ君大變な本を讀んでゐるね、山へ来てそんな本讀む位なら、金澤に頼んで文科へでもやつて貰つたら好いだらうつて言ふんだ。それから僕も、山へ来てこんな本を讀んちやいけないつて云ふんですか、つて言つたら、いやいけないとは言はないけど、そんな暇に鑛物學の本でも讀んだら好いだらう

と云ふのだ。こつちも癪にさわつたから、あなたはまるで鬼權みたいなことを云ふんだ、僕が鬼權の家にある時今色夜叉を讀んでゐたら、そんなものを讀まんと六法全書を讀めつて怒られたことがあつたけど、自分の仕事が濟んでから、何を讀まうと寝轉ばうと勝手ちやありませんか、あなただつて酒を飲んだり、碁を打つたりしてゐるのだ。僕が老子を讀まうと何を讀まうと勝手なお世話だ。と言つてやつた。すると、いやいけないとは言はないさ、兎に角君は老子を讀む、豪いもんだ。井上君は老子を讀む、豪い。こんど東京へ行つたら金澤にさう云つてやらう。豪い、豪い、つてまるで餓鬼の言ひ草だ。四十にもなつて髯を生やした奴がわい／＼言つてはやしてゐるんだ僕も馬鹿々々しくなつて、吹き出しちやつたんだ』

『ふむ、そりや面白かつたな。俺が宿直をした時か』

『あゝさうだ。その時は僕も馬鹿馬鹿しいから、水車の茶屋へ酒を飲みに出てしまつたけど、考へて見ると情けなくなるよ、君、その馬鹿が僕等の所長なんだ。さうし

て鑛主はこんな奴を使つて、僕等を支配したり、壓迫してやがるんだ。僕は子供の時に家が一ぺんに没落して、激しい轉變を見せられたり、母親はお有難の凝固よりだから、厭世的教育をされた故かいつでも世の中がつまらない氣がして仕方がないんだ。けれどもこの頃になつて本當に世の中はつまらないものなのか、こんな下らない奴に感情を蹂躪され、生活を支配されてゐるものだからつまらないのだからわからなくなつたんだ』

三十二

『そりやあさうだとも、本當にさうだ』

『だから僕は、もうこんなつまらない奴等にこき使はれない生活がしたいんだ。それでも此の世の中と云ふものが本當につまらないものなら、その時は自殺するだけの事だ、僕等にはまだ、本當に世の中はみてゐられないんだ。つまり奴等の爲めに、そ

れでなければかうした下らない生活の爲めに、つまらなくされてゐるんだからな』新吉は山に来てから、初めて、こんな話をするのが嬉しさうに、喋舌つたのであつた。

『だからな、俺と一しよに千島へ行かうつて言ふんだ。あすこには凄いやうな兇狀持が多いかはりにケチ／＼した暮しなんかありやしない。密獵にで、露西亞の驅逐艇に目つかつて、一發ドンとやられりやみんなお陀佛だから、下らないせゝり合ひなんかする奴はありやしない。みんなピキ／＼暮してゐる。その變り間誤つきやたたつ殺されても、誰に殺されたんだか判りやしない。だからみんな眞劍にもなれば仲もよくなるのだ。こんなくだらない陰氣臭い山ん中にくすぶつてゐるから、そんな氣になるんだ。今に俺といつしよに行けよ』と沼田はそれから、北海道の沙金山で寂しい一と冬を暮したことや、千島に渡つて、小さな密獵船に乗つてやつてきた數々の冒險の話をして聞かせた。そして最後に、

『人間てものは、俺は本當に喰ひしんぼうな者だと思つてゐる。大時化にあつて、

船が三日も四日も流されてゐるときは、どうでもなれと思つてゐる、けれどそんなあとも港が見えると、こんだあそこに着いたら、何か甘いものを喰はうかと思ふ。考へてみると下らないものだ』と云つたが、

『あんまりつまらない話をして、氣が減入つて來た、二上りでも一つ聞かせてやらうか』

と、腹を突き出して姿勢を直して、眼をつぶつて歌ひ出した。髯だらけの口から出て來る聲は、不思議に鏗を持つて、美しく透つてゐた。新吉は沼田の歌ふ聲を聞いてゐると、海邊の漁村にでもゐるやうな氣がしてゐた。そとには夏の夜の月が冴えて、蟲は叢で鳴いてゐた。鑛量係に來て、堀子が鑛石を開ける音が時々聞えて來るだけで山の中は静かだつた。やがて新吉は、

『どら一廻りして來ようか』と言つて、カンテラに火を灯して、そとに出た。通洞の奥の方でかけたらしい、爆發の響きが、二三度續いて起つた。静かな夜氣を振はせ

たが、やがてまた、元のやうな静けさに返つてゐた。

新吉、村へ歸つても、事務所にあることは滅多になくなつた。それは一つには大津が酔つぱらつては下らない事を言ふのが、うるさいからでもあつたが、又た恰度山が盛んになつてきたのを目當てに、川沿の水車小屋の處に、達摩茶屋が出來たからでもあつた。そこへは坑夫も、村の若い衆達も遊びに來てゐた。さうして、いつもゴトゴト廻轉してゐる水車小屋の上の方で、彼等もいつまでも騒いでゐた。新吉もその家に行つて、酔ふと若い衆と一しよになつて、村の娘の家を押し廻つて歩いてゐた。山國の夏の夜の大氣は、若い者の血をそゝるには充分であつた。餘りさうした新吉の放縱な生活がつゞくと、沼田は、

『おい餘り酒ばかり飲んで、女ばかりこさへて歩くと、身體をこわしちやうぞ、寒いところへ行くと、酒飲みの身體はこたへがなくなるから』と意見した。新吉も沼田に言はれたときだけは、その當座、つゝしんでゐたのであつた。

坑夫の賞與の事や何かで、山の益休みは一と月遅れにすることにした。さうして事務員が集まつて、その成績調べをする頃になつて、大津は二三日續いて現場に登つてきた愈々成績表を造ることになつて、その下調べを搖籤係で造つたのを大津に見せるとき、大津はその表を、眼鏡越しにじろく見てゐたが、

『どうも坑夫の成績がみんな好すぎるね、第一こんなに大勢に賞與を出す山と言ふのはあるまいと思ふのだが』とそれでも素面なだけに、靜かに言つたのであつた。

『わしも方々山を歩いて知つてゐるけど、その何せ冬中は皆な稼ぎがひどかつたのでそれでいまにどうかしてやるからつていつてやつた事があるもんで、その、その賞の字のついてゐるのは、皆んな古い坑夫ばかりなのですから』と改まつたことになる。甘く口のきけない鈴木は、もづくと言つた。

『それは古いことはどうだか知れないけど、兎も角かう大勢に賞與をだすといふ事は困るね。第一これでは、私の手元から鑛主の方へだせはしない。何とかなほして呉

れ給へ』と大津は、その表を卓子の上に突きだした。

三十三

『いやそれぢやわしらが困るんで、なあ井上君』鈴木は井上の方を顧みた。

『君等も困るか知れないが、わたしとしては、こんなものを出す事は出来ないんだ。こんなものを出せば、全體の成績にかゝはつて来る事ぢやないか、だから私はふだんから坑夫と一しよに酒なんか飲むなつて云つてゐるんだ』と大津は井上の方をジロリと見た。井上はそれまでちつと黙つてゐたのであつたが、さういはれると、もう我慢が出来なくなつた。彼れは卓子の方へ身體をにじり出して、

『酒といはれると、僕の事のやうな氣がしますけど、一體そこに書いてある中の誰れと僕は酒を飲んだんだか御存じですか』と訊ねた。

『いやなに、君のことだと云やしないさ、けれどもたゞふだんから、そんなことが

あるとこんな時にいけないと言つたのさ』と云つて。

『えへ、』と如何にも馬鹿にしたやうな云ひ方をしたのであつた。

『あゝさうですか、僕の事ぢやないんですか、誰れも外に坑夫と酒を飲んだ人はないんだから、さうすると誰れのことでもなくなるのですな、そんなことはどうでも好いんですが、あなたは此の冬時分どんだつたかよく御調べなさいから解らないのですが、兎に角吾々は坑夫に、今にきつとどうにかするからつて、責任を持つて約束してあるんです。だから、夫れだけのことはして頂かなければ、吾々の立場がなくなつて了ふのです。それに第一、皆んな合せたつて、二百兩となる金ではないぢやありませんか』

『然し君、ふだんから私はこの山の坑夫は少し稼ぎが好すぎると思つてゐたのだ。その上にまだこんな賞與を出すことになれば、みんなの成績にもかゝつてくる事になる』と大津はその成績といふのに、特に力を入れて云つた。それは何んとなく、新

吉には考へて見ろといふ風に聞えたのでもあつた。新吉はそれを聞くと、一層ぢりぢりとしてきたのであつた。そして、

『成績つていふのは一體なんなんですか、この前安部君もそんな事をいつたけれど僕等は一噸千圓以上もする鑛石が、月に十八噸も二十噸もで、山の経費が全部で三千圓以内ですめば、随分好い成績だと思つてゐるんです。今の鑛主に百圓や二百圓出して貰つたつて何んでもありやしない。坑夫の方はそれを二十人も三十人もに分けるのぢやありませんか、僕は兎も角それだけは是非聞いて貰いたいと思ふのです。鑛主だつてその位の事はきつと聞いてくれます』と顔を赤くして云つたのであつた。見張所の周りには、二の番の坑夫がぼつ／＼上つてきてゐた。大津はもうこゝで争ふのは損だと思つたらしく、

『君達がそんなにいふなら、兎に角東京へ送つてみよう、然し私は決して賛成しな

と云つて、その表をポケットに押し込んでさつさと歸つて行つた。

『馬鹿にしてやがら、あの馬鹿野郎つ』と新吉はその後姿を見送つて呟いた。

『いゝんだ、あれで好いんだ。俺もあゝ判らねえ男だと思つてゐなかつたけど』と鈴木は小首を傾けてゐた。あとで沼田は、

『おい好い氣になつて無暗に喋舌るなよ、つまらねえ事だ』と誰もゐなくなつてからいつたのであつた。けれども、まだ昂奮の納まらない新吉は、

『だつて君考へて見給へ、奴だの安部だの、成績、成績つていふのは、自分達の給料をちよいと上げて貰ふことか、賞與が二三十圓も多くなるかのことをいふんだ。それが欲しさに大勢の坑夫を絞らうつていふんだ。そして坑夫をいぢめて、鑛主の手許が一萬圓助かつたつて、吾々に十圓も呉れやしないのは判りきつたことだ。算盤づくで云つたつて、判り切つたことなのに、無暗に成績々々つて、下らないことばかり氣にしていやがるんだ。恰度彼奴等は、人が百萬圓儲ける時に、百圓も賄賂を貰つて喜こ

んで、あとで懲役に行く手合なんだ、下らない奴だ』と云つたが、

『まあ好いや、判つた〜、俺はたい、あんな奴を相手にして、むきになつたつて仕方がねえつて事を云つたぞけよ、あは〜、』と沼田は笑つてしまつたのであつた。『だけどあんな奴は、こんなときにうんとやつつけて置かないと駄目だからな』と新吉はまだぶつ〜と怒つてゐた。

三十四

二三日経つてから、有本が新吉にさゝやいた。

『昨夕な、事務所で大津が酔つて、何うも井上は坑夫を煽て、いけない、我々も拳銃持つてゐないといけないつて言つて、東京へ拳銃を註文してやつたぞ、あんな奴拳銃を持つたつて、當りもしない癖に』と云つて笑つた。

『馬鹿だねえ、坑夫に黒暗で、三番鑿で向脛でもかつばらはしてやりたいな』と云

つて、新吉も笑つた。

『馬鹿だ、滿洲へ行つて見い、滿洲へ、拳銃なんか、何の役に立つか』と有本はまた長々と滿洲の法螺話を語つてゐたのであつた。

然し夫れから一週間ほどすると、東京から拳銃を、五挺ほど送つて來た。その日大津は、すぐとそれを腰に下げて現場に登つて來た。そして用度と二號飯場の間で、前の山に向けて、二三發はなしてから、見張りへやつて來た。

『どうだ、今日届いたんだよ、少し小さいけれど』と言つて、皆んなに見せた。けれどもそれは彈丸が五間も飛ぶかしらと思はれる程、情ない拳銃であつた。沼田はそれを手にすると、

『俺ら土方に喧嘩を賣られて仕方がないから、彈丸のない拳銃を出して、何うだ、何うだつて、打つやうな眞似をしたら、手を合せて拜みやがつた。そんな奴なら、之でも好いがなあ』と云つて、ひねくり廻した。

『之れでも好いのだよ、こんな物でも持つてゐないと坑夫なんか何をするか判らない、まあ之れでも持つてゐる方が好いさ』と大津はそれを取り返して腰にさげて、にや／＼笑ひながら歸つて行つた。

八月になつて、やつと山では盆の休みをした。鑛主はその組合の男と二人して、三人がかりで曳く俥に乗つて山に來た。さうして、帝王が領土でも巡視するやうな態度で現場を見廻つてゐた。然し坑内だけは、一寸覗いただけで止めてしまつた。現場に來て休んだとき、

『どうも山へ來るのが、一番楽しみなのだが、忙しくて來られないので』と言つて得意らしく笑つてゐた。大津は自分の妹の亭主である、その男のあとについて、自分もよく知らないことを、くどく／＼説明して歩いてゐた。その翌日は、事務所で坑夫や堀子にも賞與を渡すから、皆事務所に來るやうにと言つて歸つて行つた。

その晩事務員は、事務所へ歸つてから、坑夫に渡す、賞與の上包や辭令を書かされ

た。そしてそれは、採鑛係が出した表の通りであつたのが、鈴木や新吉の心を慰めた。大津はもうそんなことは忘れたやうに、明け放した奥坐敷で酒を飲んでゐた。

その翌日は、眞夏の空がよく晴れて、朝風の涼しい中から、坑夫や堀子はどしどし村へやつて來た。村境の繁つた葉蔭に、新らしい絆纏の紺と白とがちらちらと見えてやがて事務所の廻りも、紺の香りで一杯になつてゐた。丁度その頃普請してゐた、新家の縁側に卓子を据ゑて、鑛主は一場の挨拶をした。

「當山も諸君の勤勉によつて、漸く盛大になつて來たのを、私は茲に感謝する次第であります」と云つたときには、鑛況不振と云つては、坑夫の稼ぎ高をぐづぐづと云つて來た人の云ふ事とは新吉には思はれなかつた。

その挨拶が済むと、安部はその卓子の前に立つて、重ねて賞與の包に書いてある名前を呼び初めた。大津はその傍で、坑夫には絆纏を、女には浴衣をつけて渡してゐた。用のない事務員たちは、事務所の奥で雑談に耽つてゐたが、沼田と新吉は、前の木立

の蔭に涼みながら、もうだんだん暑くなつて行く日を、洋傘でよけながら、いそいそと歸つて行く坑夫の列を眺めてゐた。

一人者の坑夫等は、その足ですぐ下の茶屋に寄つたと見えて、その二階からは間もなく大きな歌の聲が、響いて來た。

三十五

「何のことはねえ、小學校の卒業式だ」と沼田は呟いた。

「それもいゝけど、あの成績、成績つて云つた安部や大津が、一生懸命にあれを渡してゐるのは、ありや何う云ふ譯なんだい」と新吉が云つた。

「あれで好いんだ、奴等みたいなおべつか野郎は、なんでもあんなことがしたいんだ。こつちが樂が出来て好いさ」

「僕は今夜、あの用度のことを一遍訊いてやらうと思つてゐるんだけど、こつちが

苦心してこさへ上げて、ちゃんとあつしてやつてゆけるのに、随分馬鹿にしてゐる話だからな」

新吉はまたその頃のことを思ひ出して不平らしく云つたのであつた。

「うつちやのとけよそんなことは、どうせこんな山に一生ゐるわけでなけりや、下らないことを云ひ合つたつて仕方のないことだ」と沼田が云つたので、

「それもさうだな」と新吉も諦らめたやうな顔をしてゐた。

午後になつて鑛主は、事務員に賞與を渡してしまふと、

「まだ忙しい用が澤山あるんだ」と云つて、昨日から待たせてあつた俵に乗つて、殺風景な山の事務所から逃げて行つた。彼等は山に來た時に、嚴しい細君の監視から放れて、氣保養をする事は誰れも知つてゐたのであつた。

鑛主が歸つて了ふと大津は、

「あゝ之れで一つ片が附いた。お祝ひに一つみんなで一杯やらうぢやないか」とは

しやいで、成績のことはもう忘れきつたやうな顔をしてゐた。

「採鑛係の表は、訂正もされませんでしたな」と新吉が云つたとき、

「あゝ金澤は腹が大きかつたからよかつたんだ」と云つて、いやな顔をして黙つてゐた。

大津と新吉の間の感情は、その後もだんだんこぢれて行つた。新吉は事務所に歸つても不愉快なので、多くは山に泊るか、村に歸つても、茶屋へ行つて酒を飲むか、娘のゐる家に泊りこんだりして、放縱な荒んだ日が續いて行つた。沼田はときどき

「下らねえ事はよせよ、あんな奴と仲を悪くして、自分の身體をおやして何うするんだ」と意見をした。

「俺もこんな暮しをしたかないんだけど」と彼れも此の頃の生活を考へて、村の娘に子でも出來て、背負ひ込むやうな事になつたら、と、ぞつとすることもあるのであつた。そして、

「二人で何處かへ間借りして、自炊しようか」と云ひ出した。

「さうだ、その方が好いや、そしてお前は好きな本でも讀んでゐりや、酒も飲まないやうになるだらう、さうするんだ」沼田はすぐに賛成した。

二人は村の家を方々探して、やつと梅が澤に、老人夫婦で靜かに住んでゐる家の離れを借りることに極めたのであつた。沼田と二人で大津に、

「二人で間借りして自炊をしようと思ひますから」と云つたとき大津は、

「や、獨立かね、それも好いだろ、あはゝ」と、不愉快らしく笑つてゐた。

引越の日には、二人共現場から早く歸つて來て、大きな夜具包と僅かな荷物を馬につけさせて、

「や、どうも長々お世話になりました」と、事務所の婆さんや娘さんにも挨拶してクロを連れて出て行つたのであつた。新吉は事務所を出ると、身が輕るくなつたやうな氣がした。

「このまんまもつと愉快なところへ行けると好いんだがな」

「いまに行けら、いつまでこんな所にこびりついてゐるものか」と二人は近道の裏山を越しながら話し合つた。

その家は梅ヶ澤と云ふ、本當に澤谷らしいところにあつた。二人が借りたのはその裏の離れ家で、そこには此の邊に珍らしく天井も張つてあつたが、北に向つた陰氣な部屋であつた。新吉はその家にはひつて見てから、すぐ裏の方へ行つた。家の後はすぐ岸になつてその下には綺麗な清水が、叢のもう萎れかゝつた葉の下をくゞつて流れてゐた。崖の向ふは平らに開けて、小さな丘が遠い山の麓の方まで、長く起伏してゐた。それは如何にも高原と云ふやうな姿であつた。もう冷たくなつた夕暮の風が、その丘に生え繁つた、薄や雜草の上を、吹き渡つてゐた。そして空は靜かに暮れて行つた。

「おーい、何をしてるんだ、早く来て片付けねえか」と沼田の怒鳴る聲がしたので新吉はやつと座敷へ歸つて行つた。部屋にはもうランプをつけて、沼田は荷物を片付けてゐた。新吉もそれを手傳つたが、僅かな荷物はすぐに片附いてしまつた。母家で炊いて貰つた飯で、晩飯を濟ませてから風呂に入つて、やつとその部屋に落ちついたとき、新吉は長い々々旅をして来て、やつと家に歸つたやうな氣がしたのであつた。

「僕は犬に飯をやるのを忘れた。あいつ事務所へ歸つて了やしないか知ら」と云つて、新吉は縁側に立つて口笛を吹いた。高い縁の下でがさ／＼と云はせて、クロはすぐに飛び出して來た。犬はそこでちやんと寝てゐたのであつた。

「石塚へ行つたときは、こん畜生やつぱりやきもちをやいたのかしら」と思ふと、新吉は一人で可笑しくなつた。そして又飯を盛つてランプをぶら下げ「來て、それをつけてやつた。クロが飯を食つて了うと、彼れはやつと安心して、中にはひつた。

「静かで好いな、これからやつと自分の生活が出来るんだ」と新吉が云つた。

「俺も氣がつかかなかつた、早く事務所を出ればよかつたがな」と沼田は云つた。そして新吉は久し振りで手紙を書いたり、本を讀んだりして、静かな一晚を過ごしたのであつた。

その家から山の現場へ行くのには、襷ヶ澤の官林と云ふ、杉や檜の老木の繁つた、薄暗い山を越すのと、迂回して飯場の後に出るのと、二つの道があつた。何つちへ行つても深い谷らしいのが新吉の心を喜ばせた。そこには處々、清水が、石を洗つて流れてゐた。明るい灌木の林の奥には、赤い小さな實がなつて、小鳥はその間を飛んでゐた。クロは林の中や叢を嗅ぎ廻して駆け歩いた。そして叢から飛び出した山鳥は、ばた／＼と云ふ大きな羽音で夕暮の静かな空氣を破つて、クロを驚かした。蝮蛇が彼れの首根つこに喰ひついた。その時はクロも弱つて、大きく脹れた首を振り／＼二三